
\ (^o^) /

ティッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼（＾○＾）／

【コード】

N3548W

【作者名】

ティッシュ

【あらすじ】

ひきこもりニートが成り代わり転生する話

転生成り代わり物語（前書き）

処女作つす

転生成り代わり物語

「突然だがお前は死んだ」

(いきなりイケメン野郎か。ふざけたことを言いやがった。)

「ふざけてねえよボケ」

「……………えっもしかしてよくある小説の展開？」(てっことは今日の前にいるのは…………)「そうです俺が神様です、てっことで部下が阿呆な事やったからお前に“成り代わり転生”をしてもらうもちろん3つだけ願ひ叶えてやる」

「OK把握じゃあまず一つ目は、顔と体系と男のままにしてくれ」

「えっまじで？別にいいけどよー」そう！この男は、はつきり言ってる顔があまり良くない！体系も筋トレで前よりかは良くなったが肉で隠れて見えない！まあよくてもポツチャリとデブの境界である。

「いいんだよぶつちやけ自分じゃないみたいで気持ち悪いし、二つ目は家族を幸せにしてくれ」(まあこんな俺でも息子だと思ってくれてたみたいだからな。…………まあ少々溺愛すぎかもしれないが…………)

「家族思いだな(いいやつだな見た目に反して)で最後は？ぶつちやけそろそろチートみたいな能力にしたほうがいいぞ？」

「あゝじゃあそこに着いて考えてから決めるは」(そのほうがいいろと有利だからな)

「わかったでは今度こそいい人生を祈つてやる」…………フツ

オギヤアオギヤア

「おお生まれたか！よくやったぞ！」男はなきながら赤ん坊を持ち上げた。

「ええあなたこの子の名前を付けてくださるかしら？」どうやらこの2人夫婦らしい

「ああもう考えているさ！この子の名前は…………サルスケだ！」

「オギヤアオギヤア(まっまさか…………フェアリーテイルかー！)

「じねはひきまじりーんが転生する話。」

転生成り代わり物語（後書き）

はいっというわけで初めましたお手柔らかに
（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

早送り(前書き)

反省はしているが後悔もしている。

早送り

やあ！転生したサルスケ5歳だ！

なぜもう5歳になってるかわ聞かないでくれ。

「さてどうやらこの世界のサルスケいやジェットはどうやら前にも神の部下がバカしてジェットを“いなかったこと”にしちゃったそうだ、そこで神はその世界を凍結したらしい。そしてまたバカして俺がきて神がちょうどいいと俺を転生させたそうだ。」
「ふうこんなどこかって俺はいつたい誰に説明してんだ？これじゃあまるで基地外じゃねえか、あつ後はなんか神様がオマケをくれるそうだ、なんかお前じゃあ余裕ですぐ死ねるからくれた。（これじゃあ面白くないからなby神様）うんまあ要するに原作介入しろやコラですわかります。」

「……やだああ！！ざけんなっつーの！こちら元二ト兼ひきこもりだぞ！体力のなさなめんなコラッオ？あの糞神めあの野郎イケメンだからってなんでも許されると思ってたのか（怒）！次あつたらピーーして（汚い言葉をいっています。）（やって）汚い言b……）やる！」

「ゼーゼーはあすつきりした」

「サルスケどうしたのー？そんな大きな声出してー」

「いやなんでもないよー（汗）。」

「……少し声の大きさに気をつけよ（汗）」

「……さてじゃあ原作介入かあはつきりいって嫌だなあまあフェアリーテイルのキャラに会いたいしな……」

……サルスケ考え中

よし決めた！原作介入しよ！それにジエッドってそこまでテレビに出てねえからな（笑）あんまでしゃばらなきゃいいし（フラグ）まあこつちには原作知識があるからな、なにもない俺だがこれはすごい武器だそれにたしかジツエドって加速魔法だっけ？クーガ兄貴の真似できるじゃねえか！よーしさっそく修行だぜ

〃ヱ（*）ノ

「サルスケーご飯よー」

「はい」・・・なんだよ明日から本気出すってまあ見てな（笑）

サルスケ5歳、修行やるといつてやっていない。

サルスケ6歳、修行初める。

サルスケ7歳、加速魔法習得と同時に倒れる。その後のサルスケのコメント、デブでも早く動けるんだぜ？

サルスケ8歳、加速うまー

サルスケ9歳、魔力、魔力コントロールと加速魔法がスムーズに成長する・・・身長も増えたが体重も・・・

サルスケ10歳、加速魔法以外まったく才能なし、その時のサルスケ氏のコメント「ウソダ！ドンドコドーン！」

サルスケ11歳、吹っ切れる「加速魔法で俺は逃げるぜ！」「チキ

ン魂が再び戻ってくる。

サルスケ12歳、人生生まれて初めて母親と前の妹以外の将来が楽しみな娘にチヨコをもらう。……6歳年下だが。

サルスケ氏のコメント「いやたしかに嬉しいけどさあー」ちなみにチヨコの数は1個である（母を覗いて）。その時の娘のコメント「あんまり笑わないけど一緒に遊んでくれるんだ」（前に妹がいたので気軽に遊んだだけである）

糞作者：「リア充爆発しろ」

サルスケ13歳、加速魔法で手を岩に殴って見たが効果がない、今ひとつのようだ。きれる、加速魔法を使い足で岩をおもっいきり蹴る結論、粉々になった。

その時のサルスケ氏のコメント「俺今度から足で蹴っていきます」

サルスケ14歳、厨二病発症

「もしもし神様」

「なんだ願いを決めたのか？」

「ああ、銃をくれ」

「えっそれだけ？（くだらねえなオイ）魔法型銃だがいいのか？」

「衛宮の親父さんかつこよくね？」「お前はカツコ悪いがな」

神様のコメント「あいつの願いがまったくくだらないからオマケと銃を改造しちまったじゃねえか」親心つてこんな感覚なのかと神様実感する。サルスケ銃の練習する。追記、全く才能なし（笑。）

サルスケ15歳、神様オマケの事を話す

「……って事だからOK？」

「把握」

サルスケ16歳、ギルドに入ると言う。

その時の両親のコメント

《いいよ》アツサリ

……悲しくないあっさりOKいわれたからって悲しくなれない断ったら言い訳できたのに。

キングクリムゾン！！

フェアリーテイル前 今ここ

早送り（後書き）

『おい』

「なっなんでしよう（汗）」

『お前後ずけする気だろっというかもうしてるよな？これ』

「やっやだなあそんなことするわけないじゃないですかあー（ばっ

馬鹿なもうバレてるだど！？確かにする気満々だが）」

『（ん中見えてるから』

「あっ」

ギヤヤヤヤヤアアアアア

あれ？履歴書必要だったの？（前書き）

これは酷い話だ

あれ？履歴書必要だったの？

ハロー、サルスケだ！。

今フェアリーテイルの前にいる正直もう帰りたいなぜかって？、いや、俺対人恐怖症なんだよな〜なんか緊張して声が無愛想だった前の妹にいわれたし・・・。

ハアーさて勇気を出して前に進もう。

扉の前に歩きドアを開けた。

「すいませーん」

ザワザワザワザワ

おっ結構にぎやかだなこれならモブキャラに徹しれるな（俺が許すと思うか？b y 糞作者）ってあり？

シーーン

えっなにやだ怖いなんで全員俺見てるわけ（汗）見るな！ワイワイしてなさいメツ！（もうすでに混乱気味なんD A b y 作者）。

えーい！助けてエーリン！（無理ですというか許さんb y 作者）。あっミラジェーンちゃんじゃん！たしかルーシィちゃんもミラジェーンちゃんにギルドマークのスタンプ押してたし・・・よし！行って話そう。

ミラジェーンに向かいながら歩いてるがその時間が遅く感じた。

まだ着かねーのか目が目がー見るな見ないでケロー！（もう心ん

中では混乱気味である)。

そんなサルスケの混乱と恐怖の中やっとミラジェーンの前についた。よし着いた(汗)なんか長く感じたZE(嫌な事は長く感じますb y作者)。

「すみませんギルドに入りたいんですが……」
「あっはいわかりましたじゃあこの紙に書いてください。」ガサッ

……あれこんなのあつたけ? まあいいや。

さて内容は……

Qあなたの歳は? A 16歳。

Qあなたの家族構成は? A 父、母、俺。……これ書く必要本当にあんのかよ。それでさまさままなことがあつたが適当に省略しよう。

「書きました」

「はいじゃあスタンプ押すところは?」

「左肩で」

ポン

「はい押したよ、ようこそフェアリーテイルえ!」

あっさり決まったなオイ

「おいお前」

ん？

「俺ナツ・ドラグニルよろしく！」

「サルスケだよろしく」おお！主人公だぜ！握手されたぜ・・・いつぶりだろう握手したのは（涙）まあそれから原作キャラ達に会っからクエストを見た。うーんどれをするか迷うが討伐クエストにするか雑魚らしいし、さっそくマスターんここにいった。

「マスターこれを受けたいのですが・・・」

「んっわかったぞい頑張れよ」

さてといくか・・・ラディカルグットスピード！！

side out

sideミラジエーン

今日もフェアリーテイルはにぎやかだ、ナツとグレイとみんなが暴れてうるさすぎるけど・・・

ガチャ

誰か帰って着たのかな？

そこには男がいたオレンジ色のコートを着て（ジツエドがあまりにも薄いのでコートだけでもと）顔は無表情（混乱してるんDA）彼の発している空気が暗かった（対人or視線恐怖症、元いじめられっこ兼ニートひきこもりあとはわかるな？）みんなも固まって彼を見ていた。

彼はこちらに歩いて来た

「すみませんギルドに入りたいんですが・・・」

どうやらギルドに入りたいらしい

「あっはいわかりました」彼はギルドに入った名前はサルスケというらしい。ナツが話しかけて話し返した以外とフレンドリーな感じだギルドのみんなも話しかけてきた少し話した後、

彼はマスターに話しかけてクエストに行くらしいマスターに許可された後彼はフツと居なくなるとどうじにすごい風が吹いてきたどうやら彼の魔法らしい、ナツとかが「戦ってみてー！」とハイテン

シヨンだった

まあこの後すぐに帰って来たのはみんなびっくりしたあんな遠いところからすぐに帰って来たんだから。

あれ？履歴書必要だったの？（後書き）

『おい』

「はっはい」

『なんだよあの手抜き感、舐めてんの？』

「いついやあれは、私めの文のなさというか」

『言い訳無用というかさりげなくでてんじゃねえよ
アッーーーーー!?!?』

駄作だな（前書き）

東方不敗まじカツコイイぜ！！

駄作だな

よおジエツトだ！

ところで俺の名前を見てくれ

こいつをどう思っ？

糞作者

：「すぐく・・・ジエツトです・・・」

なんか知らんがクエストやってたら、
いつの間にか

ジエツトってアダ名

が定着していた。

何か知らんがそうなっていた

未知の恐怖を味わったぜ・・・。

それにナツ達が「俺と戦え〜！」と言ってくる。

どうしこうなった・・・

普通に嫌じゃ！

エルザとかラクサス

とかと戦えよ！

バトルジャンキー共が

俺はお前らと

違つて加速魔法

と神様にもらったヤバイ銃しかねえんだよ！・・・まあ奥の手はあるけど・・・

本当にどうしこうなった・・・（涙）。「そんなわけよってオ

「イ！ジェット聞いてんのか！」

「ん？ああ聞いているよドロイ」

ああ、そういえば俺今ドロイと話しています。

「でよお、俺は一目みてズキューンて来たね！いわば一目惚れさまジレヴィちゃん可愛いぜ」

こいつの名前は　ドロイ髪型が

植物の芽の形

してる男だ

たしかこいつの

魔法も植物

使ってたっけ？

もう細かい事

覚えとらん

それにレヴィちゃんに告白して

一秒で振られた

らしいが、それでもまだ諦められ

ないそうだ

・・・・・・ある意味

すごい漢だ。

ドロイとこうして

話せるまで仲良くなったのはこんな感じだ。

俺クエスト終わらせてギルドに戻る

ドロイ財布忘れる　俺友達欲しい

ドロイ財布がにい　よしだったら奢りだ！

いろいろあった

レヴィちゃんのノロケ 今ココ

いや本当にコツコツとやった甲斐があったよ本当に（悲）

ありがとう「友達の作り方」（556円）よ君のおかげで友達みたいな関係ができた。

「で、お前は好きな奴はいるのかよ？・・・ハツまさかレヴィちゃんじゃねえだろうな！！！！」

ドロイがあらぬ疑いをしてるが違う断じて違う！。

「違うよ確かに彼女は好きだし可愛いが恋愛感情はない（苦笑）」

いきなり何を言うかと思えば何故そうなんだよ、

まあ確かに可愛いが本当に恋愛感情はない。

えっ彼女欲しく

ねえのかって？

えっなにそれ？

それってイケメンに

かぎるでしょ？

・・・悔しくなんかない（涙）

「リア充爆発しろ」ボソッ

「んっ何かいったか？」

「いやなにも」キツパリ

「いやでも安心したぜ、だけどレヴィちゃんに手えだしたら殺すかな」

・・・顔は笑ってるが目がマジだった。
逃げるか

「わかったよ（苦笑）じゃ俺はクエストに行くよ」

「おいおい働きすぎじゃねえか？」

「大丈夫だ問題ない」ぶつちゃけ、今のお前が怖くていたくねえ。

side out

side ドロイ

俺は今目の前の男と話している。

名前はサルスケという名前らしいが今はジェットってアダナだどっちかというところにはジェットの方が合ってると思う。

アダナの由来は

こいつがクエストを受けて帰って

くるのが早い

からだまあそんだけだ。つたらしいがこいつがヤバイのは“遠い距離”から“走ってすぐ”帰ってくるところだ。

どんな依頼を受けてもすぐ達成して帰ってくる

(その後借りてる家でぶっ倒れます)

だがデカイ魔獣を討伐してすぐ帰って来た(神様・・・武器・・・ヤバイです)のはほとんどの奴らが驚愕した(ラクサスはオレ様の塊なんDA)。

魔獣の返り血コートとかにこびり付いてあいつの無表情に(疲れた)

少なからず恐怖した奴もいると思う。

(まあバトルジャンキにも狙われたと思うがな、ナツとかナツとかナツとかby糞作者)

まあ誰が広めたか知らないがあいつのアダナは“ジェット”になっ

たあいつも特に気にしていない様子だったし(めんどくさくなって考えるのをやめた)

まあそんな奴といつのまにか友人みたいな関係になっている。

まあ財布を忘れて今の関係になっただがなっってわかったことがある、

ジェットは無愛想だが(緊張してr・・・)ちゃんと話を聞いてくれるなんかイメージが違う、話てわかることとかがある。

まあ、あいつをいい友人だと思ってる。

・・・レヴィちゃんに手だしたら
殺すかな。

side out

side ジェット

ぶるり

なっなんだ気のせいかな？悪寒がしたんだが、
魔獣討伐に来たんだがどおいうことだよ！。

依頼に書いて会った内容と違うぞ。敵が多くすぎじゃ！ボケ！（世
の中書いてあるとこと違うのは当然by糞作者）

「ちつラディカルグットスピード！」そう俺が唱えた後空中にジャ
ンプし魔獣の大群が見えるくらいまで飛び

「衝撃のオオオファーストブレイドオオオ！！」「ドゴオオン

ジェットの放った衝撃のシエルブリットという名の飛び蹴りでクレ
ータができ、群がった魔獣の半数近くが潰れた。それにしてもこ
の男対外チートであるだが・・・

（まっまずいさっきのまっずって無駄な魔力使っちゃった（汗）

こんなタイミングで失敗すんなよ〜（涙）

まあ仕方ない事である乗り物代けちって走ってきたし疲労の疲れそ
りや魔力コントロール失敗しますって奥さん、得意な加速魔法と魔
力コントロールも失敗しちゃ無駄な燃費・・・だが・・・

(しつ仕方ない“あれ”を使うか)懐から例の物を出しそして。

「ガアアアア「ドン!!!」」

魔獣が雄叫びをしてる時、ドン!!!と音がした時魔獣の体は四脚を残して消えていた。いや“吹っ飛んだ”。ジェットに一丁の銃が握られている。

それは神様にもらった例の銃である!だがぶっちゃけ使えよと思うが威力がべらぼうにヤバイ一回ピンチに陥ってデカイ魔獣に撃つたら頭に当たって体も吹っ飛んで返り血をあびて使うの控えようと封印していたのである。まあすぐにつかつちゃったけど(笑)

「ハアーやっぱこれヤバいな・・・なんであの時銃なんていつちまつたんだ・・・ハアーまあ助かったからいいけど」

(お前がくだらない願いいいすぎるからサービスしただけだろうがby神様)

「・・・over protective gift (過保護な贈り

物ねえ・・・過保護すぎだろ)(汗)」

「まあいいやさつさと伝えてギルドに戻ろう(疲労)」

なお銃の名前を考えたのは主人公です。

オオイタイイタイ

駄作だな（後書き）

『きりきりやるんだ』

「もうめんどくさいお」

『うまく書けないだけだろっつが』

「その通り」

設定と駄文（前書き）

『オイ悪いとこ直してねえし、やねえか！』

「これ書いたら本気出す」

『とかいってまったく書けねえから時間稼ぎのつもりだろ』

「だっただ、大丈夫だモンダイナイ（汗）」

『ダメだコイツ』

設定と駄文

「Fate風

ステータスいきなり紹介ですまん。」

CLASS

イレギュラー

マスター

いない

真名

サルスケ

あだ名ジェット

性別

男性

身長・体重

175cm以上

体重？馬鹿言うか恥ずかしい／／

属性

混沌・中庸

生きる為なら

逃げる。

筋力：D+（B+）（ ）は加速魔法使用時の蹴りを当てた威力。一

般人にしては大抵のを持てる、以外と力持ち。

耐久：C

イジメられた
環境と死ぬ前
の筋トレ
からか隠れ
筋肉。

元一般人にしては、耐久だけは
一般人の範囲から抜けて
いる。

敏捷：E+(A++) () は加速魔法使用時。一般人の速さ、スタ
ートダッシュは速いが結局は抜かれる、走る相手が良くて3位とれ
るレベル。

魔法使ったら大抵逃げる戦闘スタイルからか攻撃が当たらない、本
気で走ったらあまりの速さからか暴風に近い風が吹く(筋肉痛にな
るから余り全力で走らない()のステータスは全力で走った時のス
テータス)。逃げる時はランクEXである

魔力：C

一般魔導士の魔力のちょっと多いレベル(一般魔導士の魔力はこと
いう設定。)

幸運：E

一般人の中では余り良くない、なにか良いことあった後は悪い方が
多い。

宝具：B+(EX)

能力・技術

加速魔法：A

自分を速くする魔法。このランクだとかなり使いこなせてるレベル（これ以外まったく使えなかった為ほとんどこれを磨き上げた）。技は衝撃のファーストブリットだけである。

ちなみに加速魔法を唱える時はラディカルグットスピードである。「加速とか言うんだったらなにかかっこのいい名前のほうがよかったんだ……」

銃当て：D

近くの距離ならだいたい当たる、遠い距離だと時々当たる腕前。一応ナイフを何本か持っている。

連射ならかなり速い（加速魔法使っているため。）要するに数撃ちや当たる戦法。

逃走：EX

逃げるスキル

ランクが高ければ逃げる確率が高い。

もうこのランクだと逆に清々しい。：フラグ・強制戦闘、逃走不能だからあまり意味がない

「そつそんな（涙）」

フラグ：EX

厄介事・死亡フラグ等のヤバイやつしかない。

作者：「恋愛フラグ？そんなの俺が許すわけないだろ。」

対魔力：D（一部の魔法はEX）

簡単な魔法だったらあまり傷を負わない。

何故か精神系の魔法が効かない。

ガラスのハート：B

ランクが高ければ高い程心が傷つきやすい。

このランクだとねちこつくずる引きずる

あまりにも非道い悪口を言われると現実逃避する。

言われた事ある悪口はあまり傷つかない。

厨二病：？

やけになつて痛い発言をする。 真名変更：EX

女みたいな名前でイジメられた事があるせいか自分の名前が嫌い。

真名か、変えられるある意味すごい。

宝具

対人宝具：over protective

gift（過保護な贈り物）：B+

銃をくれと願つて、くれたのだが

神様のおせかっいのおかげでかなりヤバイ銃になった。

魔法型銃の性能は連射性能と貫通がすごい化物銃、

殺すことなら貫通性能があるので、はや殺戮銃だ。

殺傷設定と非殺傷設定があるが主人公は気づいていない。

主人公以外はすんとも反応しない、この銃を作った神様まじパネエ

www。

????（EX）

対城宝具

「ヤバイ以上」

現実からフェアリーテイルに成り代わり転生した主人公。

転生する前はいじめられていた、高校二年になるころから学校に行くのをやめた。

が以外といじめられないことと妹と比べられないことから「不登校生活最高！」とニートライフを過ごしていた。

容姿は誉められたものではない、いじめっこ共は「何やっても反応ないし（我慢している）眼付きが怖いから（視力が悪いメガネは疲れるからかけていない、サカナみたいな眼）もうやんねえ」と以外とすぐ解放されたが無視しようと思ったが不登校になっっているので意味がない。

何やつても中途半端だがハマる物はすごい集中力になる。

主人公が言った事を妹が素直に従うところを見た生徒が驚いた事から学校では以外と有名人だった。

対人or視線恐怖症、鬱病など精神病が多い。劣等感の塊

現在の父
ダンディ

現在の母
美人

料理が時々ハルマゲドンになる。

前の父

元イジメられっこ、現在サラリーマンをしている。

主人公の容姿とか境遇はこの人の遺伝だが
主人公程悪くない一つのまにか会社に貢献してるところから
遺伝は血のせいだろうか？。

前の母

美人

中学3年のころ電車で痴漢されてるのを高2の現在結婚している父
に助けられた事から現在の関係になる。
息子が父に似てきていると思っっている。

孔明。

妹

ブラコン

ヤンデレ

美人

ファンクラブがある（非公式）

白髪まじりの黒い長髪

「だが、それがいい（の）」と言う変態紳士・痴女。
兄を“男”として愛してるようだ

作者：「なんであんな奴を愛してんのかまったく理解できん（怒）」

兄が不登校になったことから本当の兄を知ってるのは私だけだと歪
み笑いながら喜んでいる（両親を覗く）

兄が底底の人間なら妹は最上な人間である。

万能人間

作者：「妹をこの作品に出す予定はない悪魔で設定」

：ティツシュ

糞作者

話のなかにさりげなく出ている。

執筆力低い
駄文の元凶。

：先生

前書きとかに出る人物。モデルは小学校二年生の時の先生。作者：
「やっぱ本物の先生の方が厳しいし怖い」

神様

イケメン

規則外

天使

主人公を殺した

張本人。

なおへました際には上司に「またお前か」と言われた
どうやら常習犯らしい。

現在鬼教官にしばかれている

天使は女性

「ドジッ娘ってレベルじゃねえよ!」

アダ名「MまたOお前か。」

オマケという名の駄文

これは
正義の味方
を目指す
青年と、

やり直しを
願う一人の
騎士王
「問おう。貴方が私のマスターか」

「・・・問おう。君が俺のマスターかな？（なんで呼ばれてんの？）」
一人のイレギュラーの物語である。

槍兵と対立し。

「てめえ、どこの英霊だ!!」

「さあ？俺もわからないな、そうだな“イレギュラー”と呼んでくれ（そもそも死んでないし）」

「ハッ！なら死ねや!!」

「（やば、逃げる）ラディカルグットスピード!!」と言った直後彼はそばからいなくなった。

「なっ！ちつどこにいやがる!!」

「………ノオオオオオ

小さい音がした。

いや！違う!!

「フアアアストブリットオオオオ!!」

イレギュラーは空の上から降ってきた!

「ちついいい!!」

ランサーはすんでのところでよけた!

ランサーは自分の立っていた場所を見る・・・デカイクレーターができていた、その場所にイレギュラーが立っていた

「次は本気でやらせてもらおう（だから早く帰ってお願い!!）」

ランサーの反応を見るニイイ

笑っていた

「上等だ、この一撃手向けと受け取れ！」と言うとランサーは構えて宝具の真名を呟こうとしている。

「（＼（＾o＾）／）」

諦めた

「刺し（ゲイ・・・）」

と真名を言うのをやめた何やらランサーが文句を言っているどころやらマスターなにやられたようだ。

「ちっ、すまねえが一時中断だ、うちのマスターは臆病だからな帰らせてもらっぜ」

「・・・さっさと行け（ナイス！言峰！さっさと帰れ！）」
心の中ではビビリなイレギュラーだった。

「次は必ず殺してやる」ランサーは笑いながら言った後跳んでどんどん見えなくなった

「・・・（逃げたい）」

「オツオイあんた大丈夫か？」青年いや衛宮士郎が近づいて来た

「マスター！いけない！近づいては」

少女が前に出た

「貴様何者だ！」

セイバーが見えない剣を構えた

イレギュラーは混乱したがどうにか解決策の道を見つけた

「おかしなことを言うその青年のサーヴァントだ（だっ大丈夫だよな？主人公の両手に礼呪あるし）」

「

「んったしかになにか両手に模様があるな」と言った士郎の言葉にセイバーは士郎の両手を見た・・・確かに両手にある。

それからなんとか敵じゃないと説得できたイレギュラーは遠坂凛とアーチャーに遭遇し聖杯戦争を説明され士郎達は教会に向かった・・・まあその前にセイバーがアーチャーを傷を負わせたが・・・セイバーが近づいて来て質問してきた

「イレギュラー貴方の願う事はなんですか？」

「・・・俺に願う叶いはない（たしか聖杯って汚染されてなかったけ？）」

白い少女と

巨人との戦闘

「やっちやえ！バーサーカー！」

「ガアアアアアアア！！！」

「くっ」

「セイバー！」

士郎がセイバーを突き飛ばし眼の前に凶器が振り下ろされようとしてる、士郎はギュツと来る衝撃に眼を閉じた

・・・？おかしいいつまでたっても衝撃がこないそんな時に声が聞こえた

「おい、さつさと眼を開ける（おっ重い）」
ポイツ ドサツ

士郎は眼を開けて驚いたバーサーカーの凶器の目の前にいたのに遠坂の近くにいるのだから。

遠坂も驚いていた士郎が殺されそうな瞬間にいつの間にか士郎が近くにいますのだから。

「さあ、反撃の時間だ。（だから、がんばれ！セイバー、アーチャ
ー！！）」

これは、もしかしたらの物語

設定と駄文（後書き）

助けて〜Googleえもん！

努力はした、とりあえず見てほしい(前書き)

もう限界だ………難し過ぎる

努力はした、とりあえず見てほしい

唐揚げうめえ

どうもジェットだ。

俺は今日一人寂しくギルドで食べている、基本的に俺はドロイと一緒に食べている。

俺があんま喋らなくてもドロイは気にせず接してくれている・・・
本当にいい友人を持った（涙）

「おいジェット」

「グレイか何だ？」

俺に話して来たのはグレイ、パンツ一丁野郎以上。

「服着ろ」俺がそお言うのとグレイは

「やだよ、暑いじゃねえか」

・・・人の

忠告を無視

しやがった。

牢獄に入れられち前。

「ん、まあところで俺とクエ・・・」

ドン！

「ジェット！俺と勝負しろ！」

ナツが出てきやがった

「却下だ、エルザとかラクサスとかがいるだろうが」

本当に勘弁してほしい、主人公がバトルジャンキーすぎる笑えない。
「確かにエルザとラクサスと戦いたいがお前とも戦いてー！」

「それに今お前だけしかいねーしな！」

コイツは戦えれ

ば何でもいいのか！！

却下だ却下！！

俺にも意地がある！！

男の子なんだからよー！！。

「きゃっk・・・」

「痛ーえなコラ！ナツ今は俺がジェットと話してんだよあっちいけ
！シッシッ」

「うっせーよ！タレ目野郎」

「んっだと！このツリ目野郎」

「タレ目野郎」

ガン！

「ツリ目野郎」

ゴン！

・・・また始まったこいつらお互いに相性が
良くないらしい。

・・・頭が痛そうだなオイ。

「このタレ目野郎！」
ガッ！

ナツが殴りやがった

「てっーなこのツリ目野郎！」

ゴッ！

腹を殴った
痛そうだな。

「このタレ目（ツリ目）野郎！！」

ドガアアア！

相打ちだがナツが他の奴らの
テーブルに吹っ飛んでいった。

そこから何か
一気にギルドの全員が喧嘩しは
じめた。

今の状況は乱闘だ。

「おら！ナツもうギブアップか！」

グレイ挑発すんな。

「なわけねえだろタレ目野郎！」

ナツがグレイに飛びかかったピンピンしてる流石は主人公。

「うおおお漢はかかってこおおい！！！」

エルフマン・・・いや何も言つまい。

離れたところから唐揚げ食つてよっど。

side グレイ

「おーいジェット」

俺は今日の前の

男に話しかけている。

「グレイか何だ？」

こいつは顔と声が無愛想だが
良い奴だ。

「服着ろ」

「やだよ暑いじゃねえか」

こっちの方が涼しいんだがな。

ジエツトに話し掛けたのはクエストをやらないかと誘う為でだ。

ジエツトは基本的に一人でクエストをやっている。

誘えばこいつは断らない（寂しいからです）ドロイとレヴィとチー
ムを組んでクエストをやっている時もある。

まあ仲良くなりたいたいな。

「ん、まあところで俺と一緒にクエ……」ストやらないか
と言おうとしたら突然誰かに邪魔された。

「ジエツト！俺と勝負しろ！」

ナツだ

こいつのせいでジエツトを誘おうかと 思ったが
俺の頭からすっかり忘れていた

「おら、ナツもうギブアップか？」

「なわけねえだろタレ目野郎！」

ナツが飛びかかって来た

返り討ちにしてやる！

だがまさか、あんな状況になるなんて……

「やめんか！！貴様ら！！！」

「ゲツ！エルザ！」

俺とナツが声をあげて、喧嘩してる奴らの動きが止まった
side out

今ギルドの奴らは彼女に説教されている赤い髪で美人な女性だ名前はエルザ、フェアリーテイルのS級魔導士、ティターニア、最強候補など。

「まったくお前達二人はどうしてこう仲が悪いんだ！」っと説教されている他のやつらも説教されていた、帰ってきたドロイとレヴィ

が巻き添えを食らった。

ナツとグレイがお互いに肩と手を組んで

「ボクたち、ナカヨシダヨ」と片言言っていた……ザマア
WWW。

「ジエツト!」

こっちに向いた

「お前は何故止めなかった。」

唐揚げ食ってましたっていえない。

「ジエツト唐揚げを持ちながら遠くで食べてたよー」

なっハツピイ裏切ったな!?

「ほうお前は遠くで喧嘩をしているのを無視して唐揚げを食べてたのか」プルプルプルプル

「＼(^o^)/」

ジエツトが説教されてる時にハツピイは計画道理!っと思顔をして、
ジエツトを道ずれにした。

俺達は今盗賊共のアジト前にいる、

メンバーはエルザ、ナツ、グレイ、ハツピイ、俺である

グレイに誘われて
ホイホイと了承して
ナツも「俺も行く！」となりハッピーも付いていき、さあ逝くぞ
！つと
なつたんだが
エルザが「貴様達だと面倒を必ず起こす私もついて行く」となり現
在に至る。

それにしても盗賊共が可哀想になってきた。

まあすぐに盗賊のアジトは壊滅したが予想外な事に人質を取られた
が魔法を使ってなんとかなった、それにしても主人公陣
まじチートwww

side エルザ

今私たちは盗賊のアジト内にいる
あいつらだと必ず面倒を起こすと思い私も付いていった。

「なつなんだ！テメエらは！」

さつそく敵がいた「よしいくぞー！」
ナツが突っ込んで敵を殴り倒した後
そろそろと敵が出てきた。

「……かなりの数の敵を倒してるがまだ出てくる、えーいゴキブリかこいつら！」

「ちっ数が多すぎじゃねえか？」

グレイが愚痴る

まあ確かに多すぎるいい加減面倒だ。

ジエットは黙々と敵を倒している疲れていないのだろうか？（かなり疲れている）

敵が出てこない全て倒したか？

「動くな！」

どうやらコイツが頭目らしい。

「一歩でも動いたらこいつを撃つぞ！」

男が女の頭に魔法具を押し付けている。

「くっどうするむやみに動いたらまずいここはしたがうしかない……」

？男が動かないゆっくりと地面に倒れた、男の立っていた後ろにジエットがいた。

「（いつの間に！まったく気付かなかった）」（人質に目を向けて

いたたむ)

その後は、ギルドに戻った
side out

ああ疲れた

なんかナツに余計

戦えといってくるし・・・そついつのがなかったら良い奴なんだけ
どな。

つて、ん？

やけに静かだなって、

・・・なんか皆さん寝てるんだけどどいこと？

ザッザッザッ

ん？ミストガンかなんだ

・・・なにー！ミストガンだとおお！

おっ紙を剥がしたどうやらクエストを受けるそつだ

「お前、何故起きている？」

話しかけてきた

何故と言われても・・・

「知らん」

「……………そうか」と言っ
てミストガンは去った。

「ジェット起きておったのか」

「はい」

何故だろ？

……………まあいいや

努力はした、とりあえず見てほしい(後書き)

(一) z z z

「誰かがヤレって囁いたんだ、だから俺は悪くねえ！」（前書き）

『なんで、あんなことをした？』

「あいつが妬ましかつたんです……。」

『最後に言い残す事はあるか？』

「パルパルパルパルパルパルパルパルパル……。」

ゴシヤ

「誰かがヤレって囁いたんだ、だから俺は悪くねえ！」

拝啓

お父さま、お母さま

いかがお過ごしでしょうか？

私は元気です。

ギルドに入って一年達しましたが元気に過ごしております。
友人が何人か出来ました、私には勿体無いぐらいです。

お父さまは年を取り、ますますダンディになっていることでしょう。

お母さまは相変わらずの美貌でしょう。

私はギルドに入りましたが、私は今挫折そうです。

ギルドの全魔導師強制参加の24時間耐久ロードレースに出たくもないのに出ることになりました。

これが届く頃には終わっているでしょうが、もしかしたらそちらに戻るかもしれません。

その時はよろしく願います。

お二方は体調にお気をつけください。

サルスケより。

お母さま、本当に創作料理はおやめください・・・

お父さまと私が軽く死ねます。

ワイワイ

ガヤガヤ

ウオオオオオオ!!!

何で、こんなにテンション高いんだこいつらは。

あとエルフマンうるさいお前はいつもと変わらないがこっちは耳が痛いんだよ!。

ゴクゴクゴクゴク「ぶっはあ、さーやるか?」

始まる前に樽に入ってる酒を一気に飲みすぎいですねカナさんヒキッ

キヤアアアア

・・・っで強制参加なのになんでラクサスとミストガンと雷神衆その他もろもろいないんですかね?せこいだる俺も嫌々出てんだからさあゝ、病気とかになってる奴はしょうがない・・・俺もな

ろつと頑張ったが無理だったし。

だがラクサスとミストガンと雷神衆テムエらは駄目だ!!。

お前らは風邪とかなってねえだろ!

なにクエストいっちゃてるわけ?

えっ?ミストガン?

マスク守りながら走れ。

《キヤヤヤアアアアアアアアアア!!》

んだよ!さっきからうつせーな!。

振り向いたらそこには、

俺にとって地獄の光景だった。

振り向いたら

女性が円みたいに群がっていてその中央いる、

ある一人の男性に集まっていたそいつの名は………

《キヤヤヤヤアアアアアアアアアアアロキーー!!》そいつはロキ
眼鏡をかけた

美青年で、

「彼氏にしたい魔導師」ランキングの
上位を常に
キープしているイケメン野郎だ。

過去にエルザを口説こうとして半殺しに
されたことがある。(ザマアアwwww!!--!)

うん、まあわかったと思うが……

あいつは
かなりの“女好き”だ!!--!

なのにあいつはご覧のようにモテまくっている。

《キヤヤヤアアアアア!!--!ロキー!!--!》

「じじじじるおいぞ子猫ちゃん達」

………本当になんでモテるんだ?

「頑張るよ君達のために」キリッ!

《キヤヤヤアアアアア》

・・・ふっちっ!

おっ落ち着け!・・・心を平静にして考えるんだ・・・こんな時どうするか・・・

2・・・3、5・・・7・・・11・・・13・・・17・・・
・19。

落ち着くんだ・・・『素数』を数えて落ち着くんだ・・・

『素数』は1と自分の数でしか割ることのできない孤独な数字・・・
・・・
俺に勇気を与えてくれる・・・。

「ハッハッハッ」

《キヤヤアアア!ロキ素敵ー(ハート)》

・・・って落ち着けるかー!

本当にマジ死ね!

氏ねじゃなくて死ね!

誠死ね!!!。

・・・ふう少し気が晴れた。

あつ俺の他に血涙流してる奴がいる。

その中にドロイもいた。

・・・俺はそいつらの肩を叩きそいつらは俺を見た。

ガシッ！

・・・俺達は何も言わず手を握った。

「静かにせえい！」

そろそろ始まるか？

「フェアリーテイルの諸君！知力・体力ともに強くあつてこそその魔導師だ！」

「今日は存分にそのパワーを競いあつてほしい！」

「どう考えても体力だけだよなーお前とか」

グレイが言う

「なつんだとこの野郎！」

……お前ら実は仲良いだろ。

「ルールは簡単！ここをスタートした後に決められたコースを激走し」

「イポール山を目指せえい！今年はイポール山の頂上にモンスターの鱗を置いて置いた！」

「この鱗をとって24時間以内に折り返してここまでくるのじゃあ！」

「脱落は認めんぞー、フェアリーテイルの魔導師たるもの完走してこそ明日の仕事に繋がるというものじゃあ！」

やばいちょう逃げたい。

「例によって最下位になった者にはあ世にも恐ろしい罰ゲームが待つとるぞお！」

マスターがすっげー楽しそうな顔で言った。

いやもうあんたの悪趣味だろ。

他の奴らはぜってー最下位にならねえって顔をしている

……一部はまだイチャコラしてるが。

……エルザさんやる気満々っすね。

「ハッピー手加減しないからな！」

「それはごつちの台詞だよ！」

まあそれぞれやる気満々だな。

「それじゃあスタートラインにつけい！」

ぞろぞろ

一番後ろに付こおと

「よおい」

「ドッソ！」

ワアアアアアア

みんな一気に駆け出したって

速過ぎるだろ！

もう俺しかいねえじゃねえか！

っておい、ハッピーとか空飛んでんじゃねえか！ズリイ！

マスターに言いつけてやる！。

「マスターハッピーとかが空飛んでるんですが………」

「んっ？魔法は何でもありじゃぞ」

な・ん・・・だと!？

「それよりお主が最下位じゃぞ」

わかってるよ!

ダッ!

それから走り続けてるんだが、

一向に人が見えてこない。

それにしてもあいつら体力化物すぎるだろ（お前も体力ギリギリ化物の範囲入ってるがな。）

ん？

人が見えてきた

ってあいつは！

ロキ！

あつやべあいつ
見てたら

さっきの事
が思い出して、

腹がたつてきた（怒）

糞作者：「ヤつちまえよ。」

なつなんだ
突然頭に
声が聞こえてきた。

糞作者：「ヤつちまえよ、あいつ見て悔しかったろ？悲しかったろ？」

だが

いくらなんでも………

糞作者：「なぐにバレなきゃ大丈夫だ、それにお前はバレない奇跡の魔法があるだろう？」

糞作者：「それにロキの他に人はいるが後ろをだれも見ていない、なあにただたまたま“当たっち”まっただけだ」

ヤっても構わないのか？

糞作者：「ああ、俺は何も見えないし独り言言っただけだ（黒笑）」

殺っちまおう。

「ラディカルグットスピード!!!」

ドカアアン

「うわああああ」

アハハハハハハハ

「のわっ」

ナツに“たまたま”ぶつかり

「ちよっジエツト!?!」

グレイに“たまたま”ぶつかり

「うわっ?!」

エルザにぶつかり

「漢才オオオ!!!」

.....

そうやってるうちに

いつの間にか一位になっていた

糞作者：「やべっ洗脳やりすぎたか」

????:「なにやってんだお前」

糞作者:「せつ先生?!」

アアアアアアアアアアア!!

ギルドのみんなに轢き逃げの悪夢
とこの耐久レースは終了した。

ちなみに他のみんなは轢き逃げ一回でロキの轢き逃げは二回であった

ちなみに最下位は他の奴だった

ちっロキじゃなかった。

轢き逃げしたのがジェットとバレバレであった。

ハッ！俺はいつたい
何を!?

「おおジェット」
何かギルドの奴らがこっちに来た

「レースをしてる時のお前は最高だったぜ！ロキを轢き逃げするなんて、お前は俺達のヒーローだぜ」

「ただな全員巻き込むなよ！」

ハッ!?

そういえば確かに轢き逃げまがいのことをやっていたような・・・

(やってます。)

まあその後は
そいつらと
酒を飲んでワイワイやった
優勝商品はその時のゴールとか・・・ひどい!。

なんかギルドのみんなが俺が後ろ
にいるとき
サツてよけた。

やり過ぎたけど
その反応は傷つく・・・。

轢き逃げの悪夢

これはある

ギルドで

有名（悪夢）な話である。

ギルドのイベントでレースをしていた、

ギルドの全員が

轢き逃げまがい

の被害にあったそうさだ。

魔導四輪車とかに轢かれたのか？

と聞くがそうではない！。

これはあるギルドにいる一人の魔導士がおこしたそうさだ。

ギルドにいる人達に証言を聞いてみた。

友人D

「いやなんか後ろの方に悲鳴が聞こえるなと思って振り返ったら（名前が隠されています）が眼の真ん前にいたんだけどあっという間に轢かれちゃったよ。しばらく立てなかつたぜ。」

「どうやらかなり痛かつたらしい。」

S級魔導士

「何が聞きたいってあの事が止めてくれ・・・忘れたいんだ。」

「そんなに酷かつたのだろうか？」

バトルジャンキー

「おお！（名前が隠されています）か！いやあいつにいつの間にか轢かれてたんだよしばらく立てなかつたぜ！クーー！ますます戦ってみてー！」

「どうやら喜んでいる人もいるそうだ。」

被害が多かつた人

「いやもう散々な目にあつたよ危なく最下位になりそうだった。」

この人だけ多いそうだが何か怨まれてたのだろうか？

漢

「漢才オオオオオオ!!!」

.....

他の人達にも聞いてみたが

誰もそのことに

ついては話さない質問を返してくれたのは始めの人達だけである（

一部言っていないが・・・）。

本人にも聞いてみようかと思ったがどうやらクエストにいていない
いそうだ。

かなりの仕事人間だそうだ（家賃の為である）。

今回はこれで終了しようと思う

次回は本人に会ってみたいものである。

「誰かがヤレって囁いたんだ、だから俺は悪くねえ！」（後書き）

原作に入ると思う

o h n o (前書き)

ひどい駄文ができた。

どっ努力はしたんだ！

o h n o

俺は

今クエストを終えてギルドに帰ってる途中に

変な男性集団を今現在目撃している。

「ああい・・・」「久々のタンパク質だぜ」

「木の実にはもう飽き飽き」

よだれを垂らしながら両方同じ顔の二人の男性が言った・・・
双子か？。

「おにいっく！」

・・・あれってニワトリだよな？。

「美味そうダスなー」

水晶持つてる男がそう言った。

美味そうか？

「あーらら」「震えてやがるぜ」「イッ」

うんお前らもう双子でいいや。

「悪いな怖えだろうが俺らの胃袋に入ってもらうぜ。」
集団の中で身長が低い、おっさん顔のゴブリンがいった。

「違うよ怖くて震えてるんじゃないよ。」

青い子猫が言った。

「……ん？青い子猫？……まさかな。」

「あああ？」

「おトイレ行きたくなくなっちゃった」

「……」

「ハア？」

「いや確かにハア？だな。」

「漏れちゃうかもしれないよ。そしたら変な味になっちゃおうよ。」

言い訳乙

「うるせえ、やれ」

まあそうなるよな。

「じいっく」

ニワトリの持ってる鉈？が炎を纏った。

「ミディアムでよろしくダス」

ミディアム美味いよな。

「あああ、もう駄目かもきつと変な味になっちゃうけどいい？」

その前に自分の心配しろよ。

なんかさっきから青い子猫が俺をみんだよな！。

いや助けねえよ？相手の食べ物を取ってみたいでやじゃん。

しかしどっかで見たような・・・うーん。

青い子猫・・・ああい・・・自分より変なところを心配する。・・・
ってあいつハッピーじゃね？。

ああ！どつりでさっきから俺を見るわけだ！。

なあんだ！、

HAHAHAHAHA。

じゃあ、助けなきゃ駄目じゃん・・・面倒だな。

「おい、そいつをこっちによこせ」訳：すみません、その青い子猫
仲間なんで返してくれませんか？。

「ああん？」

「よがっだあ、変な味にならなくてー。」

「まだ言うか（汗）」

あれ本気だったんだ（汗）。

「そいつはギルドの仲間でな、悪いが返してもらおう。」

本当にギルドの仲間じゃなかったら見捨ててましたから返してください。

「誰が渡すか！それにお前こいつと一緒にいたやつと違うじゃねえか！」

「いや、それは……」

ナツってやつので

「だが！そんなの関係ねえ！やれえ！」

って問答無用かい！！。

「ラディカルグットスピード」

時よ！！俺に追いついて見ろ！！。

「なっどこに行きやがった！」

言うわけねえだろ。

「あばっ！！」「うほおああ！！」
双子の男性を蹴り飛ばし。

「にいつく！？」

ニワトリの男の前に現れたジェットに

「食らえ！サンドボム！」そうゴブリンの男が唱えたとたん砂が溢れ出し波のようにジェットを襲いかかり丸い球体状にジェットを囲い込んだ。

「へへやったか！」男は勝利を確信し男に近寄ろうとしたその時！

「ウソダアア！！」

ニワトリの悲鳴が聞こえた。

「なっ！たっ確かに捉えたはっ」

「誰を捉えたって？」

「てっ」

てめえと言おうとしたがその前に蹴り飛ばされた！。

「後はお前だけだがやるか？」

水晶の男は言った

「ふっ、なめられたものダスな・・・」

「見せてやるダス！オラの力を！」

「ウオオオオオオ！！」

男の魔力が水晶に集まりそして！！

「待ち人が近い内に来るダス。女難の相がありダス。」

.....

「それは違う奴の占いだからアア!!」

「アブロス!!」

水晶の男が蹴り倒れた。

「今縄といてやる。」

なんか臭せえ。

「漏れる！漏れる！」そう言ってハッピーは茂みに行った・・・マ
ジだったのね。
こいつら縄で締めと」。

「んっおーいジェットー!!」

この声はナツか

「ん？ナツ・・・とグレイット・・・そちらは？」

ルーシイちゃんじゃんおっぱいでけえなハアハアハア

「こいつらお前がやったのか？」

「ああハッピーは茂みでトイレに行ってる、後グレイ服」オオ！？
しまったー

「ねえナツこの人は？」

「ああコイツはジェット強ええぞ！でジェットこいつがルーシイだ
新人だ。」

「そうかよろしくルー・・・」シイと言おうとしたんだが

「ええ！ジェットって週刊ソーサリーで一番仕事をこなしてるあの
！？」

あれ？俺って週刊ソーサリーにでてたんだ。

「いや何て書かれてるか知らないが多分それであってるかもしれないな
い。」

「ララ・・・」

ん？なんだ

「ララ・・・バイ・・・が・・・」

「ああん？」

「ララバイ？」

「危ない！」

《うお！》「キヤア！？」ハッピーが頭突きして俺達は吹っ飛んだ。
《ギヤアアアア》悲鳴が聞こえて見ると男達が大きな手に握り潰されようとしている。いや違うあれは影だ！。大きな手の影が握り潰すと男たちは消えて、大きな手の影も消えた。

「なにあれ！？」「だれだあ？！」「もう気配が消えてる、めっちゃめっちゃ逃げ足が速い奴だ。」

おっ俺の方が速いんだからね！

「くっそ！わけわかんねえ」

ナツが悔しそうだな。

「ララバイ？」

そういえばそ行ってたな。

「ってそうだ！ジェット！エルザが帰ってくるんだよ！」ナツがとんでもない事言いやがった

「な・ん・・だと！？」

その後俺達は心を誤魔化すように帰った。

しばらくたって俺はギルドで今食事をしている。

「そろそろ仕事しねえとなあ
ナツが呟く

「ああい、食費がなくなるよあ」
魚食つてて余裕そうに見えんだが・・・。

「二百万ジュエルやっぱもったいなかったあ。」
もったいなさすぎだろ。

「そういえば、今月の家賃危ないわあ！、あたしも仕事しなきゃ！」
ルーシィはギルドポートに向かって選ぶ仕事を悩んでるようだ。

ミラジエーンがルーシィに近づいて「気に入った仕事があったら私
にいつてね。」

「今はマスター手衛例会にいつてるから。」
「手衛例会？」何それ？

「地方のギルドマスターが出て、手衛礼報告する会よ。」

「評議会とは違っただけとお、リーダー光ペン貸してくれる?。」

「うい」

太っ腹の男から光ペンを貸してもらいミラジエーンは説明しだした。

・・・めんどくさいからもういいや飯でも食おっと。

「おいジエツト俺にもくれ」

嫌に決まってるだろ、ぬお!これはやらんやらんぞお!!!!。

俺はナツに奪われないように聖戦したが奪われて食われてしまった。
ちくしょう。。。。。

「・・・でもね黒い奴らは本当にいるのよ。」

「闇ギルド、連盟に属さないギルドのこと、時には犯罪にも手を出す悪質の連中よ。」

途中で聞いてねえからなんのことがまったくわかんねえ。

「へえ」「つつか、早く仕事選べよ。」

ちくしょう・・・俺の飯が・・・

、おのれ・・・この恨みはいつか必ず・・・

「なんであなたにそんなこと言われなくちゃなんないわけ?。」

「だって俺達チームだろ？」

「前はオイラ達勝手に決めてたからね、今度はルーシイの番」

チームいつ組んだんだ？

「冗談、チームなんて解消に決まってるでしょう！。」

「あんた達、金髪の女だったら誰でも良かったんでしょ？」

なんかクエストであつたのか？

「それだけじゃないぜ！ルーシイを選んだのは、良い奴だから！」
「・・・ルーシイ照れてるな、これフラグたつてんじゃない？
未永く爆発してください

(^o^)

「なあに無理にチーム決めなくてもすぐに嫌ってほど誘いが来るさ。」

「グレイ、服」

あの・・・グレイさん私はドロイとあなた以外まったく誘いこない
んですが・・・。。。

「うつぜえ」「今うつぜえつったか糞炎！」

「超うつぜえよ変態野郎！」

.....

「鳥頭!」「さらさら野郎が!」「暑苦しいんだよお!」「うっせえんだゆお!」

「また始まつちやつた」

同感ですハツピイさん。

だからそんな黒い顔しないでください……。

「ルーシイ、僕と二人で愛のチームを結成しないかい?」「今夜二人で!。」

「ハア?」

「君って本当に綺麗だよねえ」キラ

まじロキ死ね。

「サングラスを通してその美しさだあ。」

「肉眼で見たらきつと眼がくらんじゃうなあ」キラ
キラ じゃねえよイケメンがつ!。

「勝手に眩んでれば」

よくいった!ルーシイ!もっと言え!

「きつ君星霊魔道士?」「へっ?」「うっん、牛とか蟹とかいるよ
お」

「だああああ、なんたる運命の悪戯あ!!!」悪戯(笑)「ごめん!僕達はこれまでにしよあ!」そう言っってロキはギルドの外に出た「なにか始まつたのかしら?」

始まってないな。

「ロキは星霊魔導士が苦手なの、昔女の子絡みでトラぶったって噂よ。」

まあ確かに“星霊魔導士”にとらぶったな。

さて星霊魔導士の女性は他にいないかなあ、今度ロキが呼んでるよって言うところ（外道）。

「うわあ！」ナツがグレイに殴り吹っ飛ばされルーシィを巻き込んだ形で倒れた。「あらあら」「いい加減にしなさいよあんたたち」ナツ早くルーシィの上から立て！

「売られた喧嘩だ買わずにいられるかあ！」俺は買いたくもないがな。

「だから服」ウオオオ？！

もうお前直す気ねえよな？。

「てめえから、ふっかけたんだろっが！タレ目野郎！」「何時何分にふっかけたっつうんだよツリ目野郎！」
子供かお前らは。

「お喋りパンツ！」「単細胞！」

「レベル低」

同感だ。

「いつものことです。」本当にな・・・カナさん本当に一気飲みすごいですね。

「大変だあ！」

ロキ？なんで帰ってきたのかよ。ルーシィいるから今日はこないと思っただが。

「エルザが帰って来た・・・」とロキが言った後時間が止まったかのような錯覚に落ちた、知ってるか？これ時間動いてんのにみんな一ミリも動いてないんだぜ？。

「エルザさんって前にナツか」ってた。」

まっまあルーシィちゃんはまだ入ったばっかだから知らないんだよな。

・・・これから関わるだろうが強く生きてくれ・・・。

「今のフェアリーテイルでは最強の女魔導士と言っても言いと思うわ。」

ミラジエーンさん最強じゃなくて最恐間違っではいけない。

なっなにかすごい足音聞こえるんだが、俺はエルザが少しずつ向かって来るのをさながら死の宣告と思った・・・。

きってきたってギヤヤヤアアアア！！なっなんじゃそのでかい角みたいのはああああ！！。

「今戻ったマスターはおられるか？」

おりません。

「きつ綺麗」見た目はな

「お帰り、マスターは今定例会よ。」

「そうか。」

「エルザさんその馬鹿デカイのはなんすか？」
「そっそっだなんすか？」

「討伐した魔物の角だ、地元のものが土産にと飾りをつけてくれてな。迷惑か？」

《いえいえそっそんなことないです。》と二人の男が言った。

「お前達！」

「なっなんだ!？」

「旅の途中で噂を聞いた。」

「フェアリーテイルがまた問題ばかり起こしているとな！」

「おっ俺は起こしてない無実だ！」

「マスターが許しても、私は許さんぞ！」
「カナ！なんという格好で飲んでいる。」

そんなぐらい許してやれよ……。

「イジター」「はいっ!」「踊りなら外でやれ。」

「ワカバ」「ギクリ」「吸い殻が落ちているぞ」

「ナブ」「うおっ?!」「相変わらずクエストボードの前をつろつろしてるだけか?、仕事をしろ。」

きつい言葉だな……ナブどんまい……だがお前が悪い。

「マカオ!」「うおっ!」「………ハア」「なんかいえよ!」「これはこれで酷い。」

「ジエツト!」

俺もかよ!だが俺は何もやってねえぞ!!!

「俺は何もやってないぞ。」

「ほお、お前がクエストに向かっている先々には突然暴風が吹いてきたと聞いたんだが」

「(汗)」
「多分俺だわ。」

「今日はここまでにしといてやる。」ため息を尽きながら言った。

できることなら俺を注意してほしくなかった。

「ナツとグレイはいるか？」

「やつやあエルザ今日も俺達は仲良くやつてるぜ(汗)」「あい」「ナツがハッピーみたいになったー!。」

「そうか、親友なら時には喧嘩もするがしかし私はそうやって仲良くしてるのを見てるのが好きだぞ」

「いや、親友つてわけじゃ・・・」

「あい」

「こんなナツみたことないわ!」

「ナツは昔エルザに喧嘩を挑んでボコボコにされちゃったのよ
今現在もだがな。」「あのナツが!?!」

「グレイは裸で歩いてる時にボッコボッコに」

「ロキはエルザを口説こうとしてやつぱりボコボコに自業自得だね。」

「やつぱそおいう人・・・」

解説ありがとうございますマカオさんカナさん

あとロキさまあ W W W

「ナツ、グレイ、それにジェット頼みたい事がある。」
俺も？

「仕事先で厄介な話を耳にした。本来ならマスターの仰ぐところだ

が、早期解決が望ましいと私は判断した。三人の力を貸して欲しい
ついて来てくれるな？」

あれ？付いて来る前提なの？。

「出発は明日だ準備をしておけ。」

あつもう行く事決定ですかそうですね。

今俺達はマグノリア駅にいる。

「だああは！。なんでてめえと一緒にしやなきやなんねえんだよ！」

「こつちの台詞だ！エルザの助けなら俺一人で充分なんだよ！！！」

「あつそうかじゃあ、俺は帰るからエルザになんとか言つといてくれ。」

ラッキー！じゃあ頑張れよ！。

「ちよつ！帰らないで私をこんな気まずいなかにおいてかなで！
え〜といつても

「ジエツトさつきのは冗談だ！頼むから帰らないでくれ」「じゃなきや俺達とお前か`エルザに殺されちまう！」

.....確かに仕方ない。

「ちっ」

《舌打ち！？》

「すまない待たせたか？」

「あつ！エルザさつうわ！」

うん・・・まあ驚くよな荷物か、すごい多いからな。

「今日も仲良く逝ってみよー」「あいさあ」

「出た！ハツパイ二号！」

でルーシイがエルザに紹介した後ナツが

「エルザ、付き合ってもいいが条件がある。」「おっい！」

「なんだ？言ってみる。」

「帰って来たら俺と勝負しろ！」「おい！早まるな！死ぬ気か！」

本当にナツが自殺願望者に見えて来た・・・。

「確かにお前は成長した、いささか自信がないが・・・いいだろう受けてやる。」

いやいやまだまだあなたの方が強いですって。

「うおおおおお！！！燃えて来たー！！！」

つで現在列車に乗って酔っているナツさん燃えるといっても口から汚い物出さないでくださいね

(^^)

「仕方ないなナツ私のところに来い」「あい」ナツがエルザの隣の席にすわった。

「楽しんでる」「あい」

そう言ってエルザはナツの腹に思いっきり殴った。

「デュオワツ！」

《汗》

「これなら少しは楽だろう。」

見てない俺は何も見えない。

「エルザそろそろ教えてくれていいだろ？俺達は何をすればいいんだ？」まあ訳すと、封印中のララバイを酒場で聞いて暗殺をしている闇ギルド鉄の森がカゲヤマと言う男がララバイを使ってなにか企んでるようだ。

「面白くなってきたじゃねえか！」

面白くねえから。

「来るんじゃないかった。」

だから行きたくなかったんだよ！後同感だルーシィ。

列車の中で飯を食ってる時ルーシィがエルザに質問した。

「ところで、エルザさんはどんな魔法使うんですか？」

「エルザでいい」

「エルザの魔法は綺麗だよ血がいっぱい出るんだ相手の」

「それ、綺麗なの？」

本当だから笑えない。

「私はグレイの魔法の方が綺麗だと思うぞ」「そうかあ？」

グレイが左手をパーに広げ右手をグーにし右手を左手に置いて魔法を発動した。

「わあ」

「氷の魔法さ」

グレアの手の中からフェアリーテイルのギルドマークが手のひらサイズででた。

「ああ、あんたたちそれで仲悪いの？ナツが炎、グレイが氷を使うから」

「そうだったのか？」

「どうでもいいだろ。」

まあ確かにそんな感じがするな。

「あっじゃあ、ジェット魔法は？」

俺か？

「大した魔法じゃない、ただ自分が速くなるだけだ。ナツとグレイとエルザのように応用がないしな。」

本当に速くなるだけだし、攻撃当たったら速いのなんて関係ないしな。それに銃は危ないし。

「よく言っぜ、お前のはでたらめすぎるだろ。」

「まったくだ。」

「えっ？どういうこと？」

うん、こっちも聞きたい。

オニバス駅についたどおおお！。

「鉄の森の奴らはまだこの駅アイゼンバハントにいるのか？」

「わからん、それをこれから調べる。」

「雲を掴むような話しただけど・・・」まったくだ。

「あれー？ナツはー？」

《あっ》

「発射しちゃった。」呑気にいうなハッピー!

「話しに夢中で忘れていた。なんということだ!、あいつは乗り物に弱いと言うのに私の過失だとりあえず私を殴ってくれないか!？」

「

「まあまあ(汗)」

「……しょうがねえなあ

「エルザ、俺がナツをつかまえて来る、後から追いかけて来てくれ。」

「

「えっ?でももう間に合わないんじゃないあ……」

「そうか、じゃあ頼むぜジェット」

「本当は嫌だけどな。」

「ラディカルグットスピード……!」

「ちょっと!今からいっても間に合わないっ……きゃアアア

「!

突然強い風が吹いた。

「あいつは、フェアリーテイル、一の速い奴なんだよ。あんな程度のスピードじゃあすぐ追いついちまうよ。」

「そうだな、私達も速く追いかけよう。」

・・・追いついたはいんだがトビラとかがないんだが・・・
吹っ飛ばすか。

「オラア！」

「おい、ナツ大丈夫か？」

「なんだてめえは!？」

「その影は、あの時の奴か」ってことはこいつがカゲヤマか名前道理ですねwww。

「ぎもぢわるい・・・。」

「静かにしてろ。」

「八工野郎が調子こいてんじゃねえぞ！」

「・・・今こいつなんつった？」

「ああーすまん今何て言った？」

「ああ？八工野郎だよ聞こえなかつたのかこの八工野郎・・・」
男の頬に弾道が走った。

「ああ八工野郎ね聞こえた聞こえた。」

俺、久しぶりにキレちゃったね。幸いにこの車両にナツと男以外いねーし、殺してもいいよな？ストレス発散したいしなっいいいだろ？、それに結構傷つくんだよ（涙）。

「じゃあ、てめえは今からその八工野郎に殺されんだよお！」

懐からo.v・・・面倒だから銃でいいやを取り出しラディカルグツトスピードをかけ男に乱射し始めた。

「はっ！そんな弾きかねんだよお！ガードシャドウ」

男の周りにグーの手の形が無数に出て男の周りを守ったがそれを何事もなかったように貫通した。

「なっ！？」

男はなんとか狭い車両から弾をよけたが一発喉らへんにかすった。

「なにが、きかねえって？」

ジェットは男に近づき男の左肩を撃った。

「ギアアアアアアア！！！」

「きかねえって言つといて、きいてるんだが

ああー効いたふりか、じゃお腹はどうだ効くのか気になるな」

次は男の右腹らへんを撃った。

男の悲鳴が聞こえてジェットは嘲笑いながら次はどこにしようかと考えていた。

「おーいジェット」

窓から声が聞こえたグレイだがその油断で

カゲヤマに攻撃されてしまう。

「調子こいてんじゃねー！」

カゲヤマの放った影のパンチがジェットに当たった……と男は確信したが。

「おいナツあっちに移るぞ。」

ナツと荷物を掲げジェットはカゲヤマの放った魔法で壊れた車両から外に飛び移った。

車両から飛び出してエルザ達と合流した。

「よくも置いて行きやがったな！」まあ俺達が悪いから何も言えない……。

「すまない、だが怪我はないようだな。」

「何よりだった」エルザはナツを胸に移動させたがエルザの鎧で逆に痛そうだった。

「かつか硬ええ」「たくよ無事なもんか変な奴にかわまれたんだ。」

「変な奴？」

「森でハッピー食おうとした奴らをさらった野郎だ」「鉄の森とかアイゼンヴァルトって……」

そう言ったナツにエルザは目を見開き

「この馬鹿者！」ナツに平手打ちをした。

「鉄の森は私達アイゼンヴァルトが追ってるものだなぜ見逃した！」

「そんな話し初めて聞いたぞ？」

まあエルザに気絶されてたし……。

「さっき説明したろ！人の話しはちゃんと聞け！」

「それって、あんたが気絶させたからじゃあ……いろんな意味で
すごい人」

《だろお？》

俺とグレイが息が合わさったように言った。

「後、ジェットお前も何故見逃した！」

「いや、俺そいつが鉄の森アイゼンヴァルトって知らなかったぞ。」

俺、車両に降りた後思い出したし。

「くっしかたない、すぐに追うぞ。」

俺達はオシバナ駅についた。

「鉄の森アイゼンヴァルトはどこにいる?!」

「ハッ？」

「ふん！」

エルザは頭突きをした。

「鉄の森アイゼンヴァルトはどこにいる?」

「ハッ？」

「ふん！」

「即答できる人しかいらないうてことなのね……」

「エルザがどおいう奴かわかってきただろ？」

「なぜ脱ぐ？」

「鉄の森は中だ行くぞ！」
アイゼンヴァルト

もうむちゃくちゃだな……。

中に入ったら鉄の森の魔導士が大量にいた。
アイゼンヴァルト

「なっなにこの数！」
多すぎだろ！

「貴様がエリゴールか！」

「ハエがーお前らのせいで俺はエリゴールさんにー！」
あの状態でまだ動けんなんて確かに致命的は避けたけどそんな元氣
じゃ落ち込むぞ……。

「わかんねえのか？ 駅にはなにがある？」

「飛んだ！？」「どうやらエリゴールは風の魔導士らしい
「ララバイを放送するつもりか！？」」

「音量を上げれば街中にひびくだろこいつを聞いた奴らは呪い殺されんのさ！ハアハハハハハハハハハハ！！」

「残念だったなハ工共！闇の時代を見ることなくお前たちはあの世逝きとは！」

カゲヤマの影の手がルーシイに向かって来るがナツが炎の拳をまとって吹っ飛ばした。

「おーおなんか敵いっぱいいるじゃねえか！」

「敵よ！敵！みんな敵！」

「ちつ後は任せたぞ、闇ギルドの恐ろしさを思い知らせてやれ。」

《はい！！！！》

エリゴールが外に向かった

「ナツ、グレイお前達がエリゴールを追え」

《なに！？》

おい・・・こんなときなんだから喧嘩すんなよ・・・。

「聞いているのか！」

《はい！！！！》

さすがエルザさんやで！。

「うひおお女二人で何が出来るのかなあ？」

俺もいるんだが・・・。

「羽根をむしりとってやるぜ！」

「下劣な！」エルザの手から剣が出てきた。

「これ以上フェアリーテイルを侮辱してみる！貴様らの明日は保証できんぞ！」南無阿弥陀物。

「珍しくもねえ！、こっちにも魔法剣士はそろそろいるぜえ！」
男共はエルザに飛びかかったがエルザの剣の一閃で倒された。

エルザの魔法は武器と衣服を一瞬で変化させる魔法。普通の換装は武器の変更だけがエルザは衣服の能力も換装できる魔法“サ・ナイト騎士”

「循環の剣サークルソード！！」《うわあああああ！！》敵のほとんどがエルザが倒した。エルザさんマジすげえっす（汗）。

残りの人数は俺とルーシイにきたがエルザがほとんど倒してくれたおかげで難なく倒せた。まあ、その後エリゴールが魔風壁という魔法で閉じ込められて出れねえって状態になるが、ハッピーが星霊の鍵をルーシイに渡して、ヴァルゴ（美人だった。）と契約して地面をヴァルゴの魔法で出れて、ナツがハッピーの翼で先にエリゴールについて、俺達がついたころにはエリゴールを倒していた（ナツチートすぎ）、影つかつてる奴（カゲヤマだ！byカゲヤマ）がララバイの笛を奪って狙いはギルドマスターらしく笛をふくかとおもったがやらなくて、なんか笛からでかい化物が現れたけどすぐ、エルザとナツとグレイと俺オマケで倒した。

結論から言って、俺いらなくね？

o h n o (後書き)

寝みい

食べる際にはご注意ください（前書き）

一回小説出来たのですが間違っ
て消しちゃいました。

食べる際には「注意ください」

主君、

私達は今“鉄の森”を倒した後にフェアリーテイルに帰ろうとするのだが……。

「あーもう!」

ルーシーが叫んだ。

「ちょっと!ハッピーあんたまた迷ったでしょう!」

「歩いても歩いてもマグノリアの街に着かないじゃないのお!」

「この方向オンチ猫!」

そう俺達は遭難まがいの被害にあっている。

それも2日も!」

「またって失礼しちゃうなあ!、こないだは迷わなかったよ!今回が初めてなんだ。」

「初めてでもなんでも迷ったのに違うじゃない!」
「そうだ!そうだ!」

《ハアアアア》

俺達は溜め息をついた。

「腹へったなあ〜」

ナツ腹へつてもそんなこと言つなみんな我慢してんだ。
空気読!

「言つな!余計腹へるだろうが・・・」

「減つたもんは減つたんだよ!」「だから!減つた減つた言つんし
やねえ!」

お前らもうまじ黙れ・・・。

「確かに、へったのおー!」

そうマスターが言つてナツ、グレイは一緒に

《だーからあああ!!!》

お前から言つたんだろつが。

「よせ!」とエルザが言つてグ〜!と聞こえた。

「今グ〜て鳴つたぞ!グ〜つて」

鳴りましたねナツさん。

「鳴つてない!空耳だ!」

あんたか!エルザさん。

「すつすげー言い訳だなオイ。」

「うわあああああ！」

ハッピーが嬉しそうな大声が聞こえた。

「なんだハッピー？なに大声で騒いでんだよ。」

「見て！見て！ナツあれ見て！」

俺達はハッピーが指差してる崖の下を見たそこには羽生やしてる魚がいた。

「幻の珍味羽魚だ！あれめちやくちや美味しいんだあ！」

そう聞いた俺達は当たり前にその魚を釣ろうと釣りをした。

2日なにも食わなかつたら当たり前な行動である。

なに？そんな行動しねえ？だったら今と同じ状況に遭ってみな！、2日食ってない、何も草木も生えてない、崖があちこちにあるだから当然何も食い物がない、そこでハッピーが食料を見つけたんだ何がなんでも食いたいんだよ！。

「よーし！釣るぞー！」

「くそあ、こいつら釣れそうで釣れねえなあ」

ナツ黙れ魚が逃げる。

「おいら、頑張るぞお！」

やる気満々はいいから釣ってくれ。

「なんか美味しいそうに見えないんですけどお……」

《黙って釣れ》このさい食べれば何でもいい」

オレとエルザが言った、いや食べれば何でもいい状態まで腹減って
んのかよ!。

「そんなに腹減り!？」

俺は違うからな!そこまでまだ堕ちてない!!。

「羽魚食べたいぞお!美味しいぞお!幻の珍味だぞお!！」

「おいハッピー!うるせえ!魚逃げただろうがぁ!」
俺はキレたこれはキレても仕方ないだろ!

「あい……すみません……」

そうハッピーが落ちこんでるのを見て。

「ちょっとジエツトいくら何でも怒りすぎじゃあ……」
ルーシイが言った。

「そうだぜジエツトちよつといいすg……」
ナツが言った

お前らにはいわれたくないわ!

「あああ!？」

《ひっ》

「てめえらがぎゃあぎゃあ言ってるのを我慢してるんだよお!？こ
っちは魚釣れたと思っただけでハッピーの大声で邪魔されナツとグレイ
の喧嘩のうるささも我慢しエルザの理不尽さも我慢してる!・・・
ねえ俺って悪いかなあ?俺ってこのメンバーでは一番我慢してると思
ってるんだけど?ねえ?ねえ?・・・少し反省しようか・・・」

《すみませんでした(涙)》

なんかマスターも土下座してんだけど何故?

《はむかったら殺されるあれはそういう眼だった!》いろんな意
味で勘違いされるジェットであった。

その後は俺だけ魚一匹だけ釣りさっきの謝罪も含めてハッピーに渡
したちなみに味は不味いらしい。

美味しい魚だって言ってたなかった?

その後街が見えて来て飯を食おうとしたんだが人が無人なのでそれ
ぞれ調べてみたんだがなんか化物出てきた。

「街を見てみたんじゃが街の各場所に線が入っておった、あれは魔
法陣じゃ」

「何故そんなことを？」エルザが聞いた

「どうせ闇ギルドの仕業じゃろ、そんなことよりあの化物は生きておるつまり……」

つまり？

「食べるー！」

「えー！？」

いやどう見ても不味そうにしかみえねえよ！！。

「へっ」「へへえ」

「キモイ笑顔で何脱いでんのよお！」

もうツッコミキャラだなルーシイは

「さあ食うぞー！」「ご飯の時間だーい！」「このさい味がどうのと言つてられねえなあー！」

いや大事だから、……エルザさんそんなに敵に向かう程腹減つてんのかい（汗）。

不味そうだから俺は見学してよ。

「おい！てめえら俺が誰だか知ってるかあ？フェアリーテイル1の炎の料理人だあ！」

ナツの両手に炎が出て

「火竜の鉄拳！」モンスターを殴った！

「まずは火をよおく通してー！」

モンスターにナツが炎の両手で殴りまくった！

「そしてー！」

ナツが岸壁を蹴り崩しモンスターを岩に埋めた。

「蓋をしめて蒸す！しばし待つ！」ナツの魔法は竜迎撃用魔法。滅^下竜^{ラコンスレイヤ}魔導士と呼び、術者の体質を各属性の竜に変換しているため、身体能力も強化されているらしい。自らの属性のものを食べることで

体回復・強化が可能なまさにチート、ナツはちなみに火竜・イグニールに教えられたらしい。それにしても不味そうだな。

「いきなりデザートってなんだがまあしょうがねえ」
モンスターがグレイに迎ってくる。

「アイスメイク“フィッシュネット”！」
グレイの手から吹雪のようなものが出てモンスターは凍り付いた。
「シャーベット完成！頂きます。」
凍り付けにただけじゃねえか！どこのエターナルフォースブリザードだよ！相手は死ぬってかwww？

ハッピーは椅子と戦っている・・・なんで頭キノコ生えてんの？。

エルザは換装してふ〴〵ほお！わっ悪いがお子様達にはとても言えたものじゃないな・・・。
まあ当然まずかった、その後モンスターが大量に出て
ルーシイが星霊を呼び出してなんかおっぱいが好きそうなマッチョなウシで倒した。

つて、うお！なんか魔法陣が光ってるんだけど！

「逃げる！飲み込まれるぞ！」
が時は遅し俺達は魔法陣に飲み込まれた。

………んだが俺達は生きてるなんかエルザとマスターの話し
を歩き聞きしたんだがマスターが助けてくれたらしい。

「さつてのーハアそれにしても……」

《腹へったー！！！》

いつになったら帰れるんだよ……トホホ（涙）

食べる際にはご注意ください（後書き）

まだまだ逝くぞ！

下手くそすぎて笑えない(前書き)

遅れたけど誰も見てないから大丈夫だね(チラ

下手くそすぎて笑えない

なんだこの
人溜まりは？。

「おお！ジェット」 ドロイか、この人溜まりは一体……。

「エルザとナツが闘うんだよ、お前はどっちに賭ける？」
……そういえば駅でそんなこと言ってたな。

「いやエルザだろ、普通に。」

どうみても勝負見えてんだろ。

「最強チーム？んだそりゃ」
グレイとルーシイが会話してんな気になるし聞き耳するか。

「あんとナツとエルザとジェットじゃない！」
いやもうさそのネタはいいから、いい加減俺を外せ。

「はあ？くだんね誰がそんなこと言っただよ。」
ミラちゃんが笑顔を浮かべた後泣いた。

「ああっミラちゃんだったんだ（汗）」
やーいグレイが泣かした泣かした。

「たしかにナツとグレイとジェットの漢気は認めるが最強と言われると黙ってはおけねえなあ。」

「フェアリーテイルにはまだまだまだ強者が大勢いるんだ俺とか！」

自己主張は結構ですエルフマン。

「最強の女はエルザで間違いないと思うけどね。最強じゃなくて最恐の間違いじゃね？」

まあそれに

「最強の男となるとミストガンとラクサスがいるしな。って誰も聞いてねえ久しぶりの俺の台詞が・・・。」

「なににせよ面白い闘いになりそうだな」

「そうか？俺はエルザの圧勝だが」

同感だグレイ

「こうしてお前と魔法をぶつけ合うのは何年ぶりかな」

「あの時はガキだった今は違うぞ今日こそお前に勝つ！」

今もガキだろうが。

「私も本気でいかせてもらっぞ」

もう勝負みえただる本気だぜ本気？

「あっおいどこ行くんだよジェット」

「中に入ってゆっくりしてる後でどうなったか聞かせてくれ」

人が多すぎて怖いんだよ！

ああ〜やっぱ

落ち着く。

そう俺がくつろいでいると
みんながゾロゾロ帰ってきた
・・・やけに早いな

「おーいドロイどうなった？」

いややっぱ気になるし。

そう俺が聞いてドロイは暗い顔で

「エルザが捕まった」

はい？

その後に聞いてみたら勝負の途中
にカエル顔した奴
が来てエルザを逮捕したそうだ。

「だせ！ここから俺を出せえ！」

コップの中からトカゲが出せ出せと騒いでいるどつやらあねはナッ
？だそうだ。

「ナツ五月蠅いわよ」

「出せえ！」

「出したら暴れるでしょ」

「暴れねえよ！つつか元の格好に戻せよ！」

「そうしたら助けに行くって言うでしょ！」

「行かねーよ！誰がエルザなんか・・・」

というかもう行ってんだろ。

「相手が評議員じゃ今度は手の内ようがねえ」

「出せえ！評議員だがなんだが知らねえが俺は一言いってやるんだ！間違ってるのはあっちだろお！」

こっちが悪いようすんだが町を俺以外？半壊してるって聞いたぞ。

「白いもんでも評議員が言えば黒になんだ、うちの言い分を聞くもんか」

「しっかしなあ今まで数々やってきた事がなんで今回にかぎって・
」

「ええ理解に苦しむね」

「絶対絶対なにか裏があるんだわ」
いや人間それが普通でしょ。

我慢を切らしたのかルーシイが立ち上がってマスターに
「やっぱり我慢できない！証言しに行きましょう！」

「まあ待て！」
マスターが止めた。

「何言ってるの？！これは不当逮捕よ判決が出てからじゃ間に合わない！」

「今から行っても判決には間に合わん！」

「ジェットがいるじゃない！」

ちよおま

嫌だよ！行ってもどうせ帰ってくんたし行き損だよ！

「落ち着けルーシイ大丈夫だからそれにマカオもういいだろ？」

正体はすでにあがってるんだよ！。

するとどうだろうさつきまでナツの声のトカゲがおっさんもといマカオになった。いや戻ったか。

「へへっばれちまったか悪いな、ナツには借りがあってよ」

「じゃあ本物のナツは・・・」

すでに評議員んとこに殴りこみに入ってるだろうな。

「まあ大人しく待とうぜ大丈夫だから」
多分な

まあ悪魔で罪を着るだけで罰は受けなしそれをわかっててマスターは止めたわけで。

「やっぱシャバの空気はうめー！最高にうめー！」

まあホイホイと戻ってきちゃったんだよな。

ナツは自由を得た囚人のように喜んでいる。

というかすぐに帰れるはずなのだがナツのせいで一日中牢屋にいらしい。

「結局、形式だけの逮捕だったのね、心配して損しちゃった」

ルーシイはテーブルでうなだれている、かなり心配してたとギルドのみんなは知っている。

だがある男の言葉により周りの空気は文字通り凍りついた。

「そうか、カエルの使いだけにすぐカエル！」

「そつそつだ！エルザとの勝負はどうするんだ？ナツ」
俺はさっきの言葉を忘れようと活路を開く。

「そ、そつだ！漢の勝負はどうするんだ！！！」
ウオオオオオオオオ！！！」

エルフマンもさっきのことを忘れようと雄叫びを上げている、いつもは耳が痛くて鬱陶しいが今はエルフマンの雄叫びが俺達の心を正気に戻す、いや 戻らなければならぬ。

周りもだんだんと正気に戻ってきたのか「そつだ！どうするんだ！？」と声を荒げている、マスターでさえもだ。

「えっおいさっきのど」そつだ！エルザ！この前の続きだー！」
グレイの声をナツが遮った。ナイスだ！ナツ、今はグレイの声を聞きたくもない。

それほど寒かったのだ。いや寒いも生温い、絶対零度に近い寒さだった。グレイは氷の造形魔法をつかうよりギャグ使った方が強いと思う。

流石、氷の魔導師である。

「よせ、疲れてるんだ」

さっきのでいろいろ疲れたからな、何人かまったく動いてない「おっおい！誰か！こいつ心臓止まってるぞ！！！」

……
俺は何も聞いてない。

「いくぞー！！！」ナツは右手に炎を出し、エルザに突っ込んでいく。

「やれやれ」

エルザは溜め息をつき、椅子から立ち上がり鳩尾を殴った。

「あっああ」

ナツの声が男の急所に当たったかのような悲鳴を上げて倒れた。

《ハアハ！？》

表現が出来ない声で俺達は口をあんぐりと口を開いている。

「仕方ない始めようか」

もう終わってます。

「終了」

ハッピーが声を出しどこから聞こえてきたのかはまったくわからないがゴングの音がした。

《ハアハハハハハ》

皆が大笑いした。「だせえぞ！ナツ」「やっぱエルザつえー！」

笑いながらグレイ、エルフマンが言った。

笑った後だろうか、皆が急に倒れ始める。

何事！？と思っていたら

いびきが聞こえる、寝ている？。

ギルドのドアから顔を隠していて、右手に杖を持っている男がギルドボードの紙を一枚破りマスターに見せた。
ていうかコイツ

「……ミストガン」

眠たそうな声で男の名前を言った。

「行ってくる」

「ホレ、眠りの魔法を解かんか」

そんなに眠いか？まったく眠たくないんだが。

ミストガンがギルドに出ようとすると、だがコイツには言つとかなきゃならんことがある！。

「おい」

ミストガンに声をかける答ええないが、なんだ？と聞くきはあるようだ。

「お前なんでイベント出なかつたんだ？」

俺が言いたいことはなぜ耐久レースに出なかつたかだ、理由はわかっているがずるいだろ。

「……………」
「答えないまるで反応は、え？そんなのあつたの？つて感じた。

だが俺は騙されん、あらかじめ交信魔法でマスターに知らされたのだから。

「お前、つぎ参加しなかつたら3日間、女装な」

別にいいだろ？前のビリの男は一週間女装されたんだ。それにそいつが考えた恐ろしい発案だ、ギルドの皆がそいつの説得（恐喝）に快くOKしていた。

「……………」

だがミストガンは答ええない、なぜだが頬に汗が出ているが。

ミストガンは歩きながらギルドから出ていった。

去ってすぐナツ以外のやつが目を覚ました。

「こっこの感じはミストガンか」

「あんにやる」

「相変わらず強力な魔法だね」

そんなに眠たくなるのか？

「ミストガン？」

ルーシイがまだ眠いのかそう呟いた。

「フェアリーテイルの最強の漢候補の一人だ」

エルフマンがルーシイの言葉に答えた。

「どういうわけか誰もその姿を見られたくなくて仕事とる時はこっ
やって眠らせちゃうのさ」

エルフマンに続きながら 그레이 が言う。

もう 그레이 の発言は寒くねえな。

「だからマスター以外その顔は知らねえんだ」

マスク被って顔はわかんなかったな。

まあ知ってるが。

「いーんやあ、俺達は知ってんぞお」

「ラクサス！」 「いたのか！」

まあ神出鬼没みたいな男だしな。

俺はマスターのいるその上の二階を見て一人の男が肘をつきながら
立っている男を見た。

というかラクサスだった。

「もう一人の最強候補だ・・・」
グレイが言いルーシイはラクサスを見る。

「ミストガンはシャイなんだ、あんまり詮索してやんな」

どっちかというとお前の方がシャイじゃね？と言いたかったが恐いので言わない。

「ラクサス！おれと勝負しろお！」

「さっきエルザに負けたばっかじゃねえか」

ナツ・・・お前はもう真のバトルジャンキーだよ。

グレイのツッコミを無視してナツは勝負勝負と言っている。

ノイローゼになりそうだ・・・

「そうそう、エルザ如きに勝てねえようじゃ俺には勝てねえよ」

ちよラクサスおまつ

「どついう意味だ！！！！」
声は平坦だがドスが凄まじい、ラクサス！速くあやまって！
お願い！。

「おい落ち着けよ（汗）エルザ」
・・・グレイ後でなんか奢ってやる。

「俺が最強ってことさ！」
自分に酔ってないで空気嫁！

「降りてこい、この野郎！」

「お前が上がってこい」

もうね、こいつら阿呆じゃねえか。

「上等だあ！」

ナツが二階にいるラクサスに駆けていくがまあ“二階”に行くのは無理だろう。

俺の考えも当たりナツがマスターに巨大化した左手で止められてた。というかS級魔導師じゃなきゃ上がっちゃ駄目なんだったっけか？

「二階に上がってはいかん！まだな・・・」

フラグですねわかります。

「へへっ怒られてやんの」

ナツが抜け出そうとしてるが無理でしたまる

「ラクサスもよさんか！」

その言葉も無視してラクサスは皆に聞こえるように言った。

「フェアリーテイルの最強の座は誰にも渡さねえよ！エルザにもミストガンにもジェットにもなあ！！俺が最強だ！」

ああああ聞こえない！聞こえない！

というかね、もうあいつらは馬鹿なの？死ぬの？

俺は弱いつつーのに確かにそこらへんの奴らに負ける気はしないよ？
負けたら死を意味するしな。

自分の魔法は速くなって攻撃するだけだしというかそれだけしか出
来ないし（充分やバイがな）。

神様から貰った銃はやばいし（とかいいながらホイホイ使ってるが
なby作者）。

てか二度とラクサスと“戦い”たくもねえ。

あん時はなんとかあったが次やったらもうムリポ

（ ^ p ^ ）

嗚呼神よ！救いはないんですか！！（ありません）

下手くそすぎて笑えない(後書き)

ジェットはラクサスにも狙われちゃったんだ(獲物的な意味で)

やな事の後には、やな事（前書き）

手抜き感がヤバイ。

マジで文才ほしい（・・）

ヤな事の後には、ヤな事

ファイオーレ王国に最強のギルドと評されているギルドがある。それは、ギルド

フェアリーテイル
“FAIRYTAIL”。

良い意味でも、悪い意味でも、悪い意味でも、最強のギルドである。

さてそのギルドも、いつも騒がしい筈が妙に静かだ。

「んだ〜？依頼書がなくなってたて？」

リーゼント頭の口にパイプを加えているオッサン事、ワカバ・ミネ36歳が言った。

「二階に貼ってあったついたら、S級の依頼だろ？」ワカバに続いて言ったのは、

マカオ・コンボルト36歳。

息子一人。妻はいたが三年前に離婚した、今はただのオッサン以上。

「もう少しなんかあるだろ！」

「マカオどうした？いきなり叫んで」

「いついや、なんか誰かに説明省略されたような電波が急に・・・」
「・・・マカオお前は最近働き過ぎて疲れてんだ。」

妻に逃げられて辛いだろうが、お前には息子のロメオがいるだろ。

たまには、息子と遊んでやれよ、お父さん（笑）

「てめえ喧嘩売ってんのか！ワカバ！！！」

ギヤアギヤア

・・・オッサン共のアホな喧嘩は無視し。

「どこの馬鹿よ、そんなの持ってちゃったのは」と言ったのは、

ラキ・オリエッタ18歳。

バイオレット色の髪の毛の紳士の皆さん大好きポニーテールに眼鏡とリボンが特徴な娘。

あとは言葉の表現がちょっと（？）アレな娘。

「ネコだ」

「羽の生えた青いネコが紙を千切ってくのを見たぜ」と言ったのはオレ様のラクサス。

「ハッピーが！？」

「フーことは、持ってたのはナツとルーシイか！？」

「何考えてんだ！あいつら！？」

周りはざわざわと騒いでいる。

「S級クエストに勝手に行くちまうなんて・・・」

「バカだと思ってたけどここまでとはね・・・」

二人組みの男女が言った。

お前から出来てるだろ、爆発しちまえ。

「これは重大なルール違反だ、ジジイ！奴らは帰りしだい破門だよ

なー？」

「フーかあの程度の実力じゃあ、帰っちゃあこないだろうがな」

ラクサスがそう言いミラジエーンが二階に上がっていく。・・・二階に上がっていいのかと細かい事は気にしてはダメだ。

「ラクサス！知ってて、なんで止めなかったの！？」とミラジエーンが問い詰めるがラクサスは

「俺にやあドロボウ猫が紙切れ加えて逃げた風にしか見えなかったんだよあ」

「まさか、あれがハッピーでナツがS級行っちゃった、なんて思いもよらなくてなあ」

とまるつきりわかってましたが何で止めなきゃいけないの？な態度を見てミラジエーンは・・・

「おほほ、あんたのその顔は久しぶりだなあ」

めちやくちや恐い顔でラクサスを睨んでいた。

「まっずいの、消えた依頼書は？」

マスターマカロフはそんなやばい雰囲気もまったく気にしないで聞いた、流石はFAIRYTAILのマスターである。

「呪われた島ガルナです」

ミラジエーンがラクサスを睨んだままなくなった依頼書を言った。

「なんと！？」

マスターが目を見開き驚いた。

「ガルナ島！？」

「そんな無茶な！？」

《あいつら、やっぱり馬鹿だ！！！》

マスターに続きナツの行った依頼の島に周りが驚く。

おい、今声揃えた男女共いい加減付き合え、降られた男共にあやまれ。

「ラクサス！連れ戻してこおい！！」

マスターが大声で言うが。

「冗談俺はこれから仕事なんだ。」

てめえのケツを拭けねえ魔導士はこのギルドにはいねえ。
だろ？

それにジェットの方が手っ取り早いだろうが。」

「今ここに入る中で！お前以外誰がナツを力づくで連れ戻せる！！」

まあもうとっくにお気づきだろうが。

主人公（？）の肩書きを持つジェットはギルドにはまだ来ていない。
・・・とことん影が薄い主人公（？）である。

「じいさん。

そりゃあ聞きづてならねえ。」

立ち上がった青年。

史上最強に寒い氷の魔導士グレイ・フルバスターが言った。

side out

さて、では我らが主人公（？）。
ジェットは何してるかというと。

「君」

ビク「はっはい」

「ちょっと聞きたい事があるんだが・・・」

ビクビク「なっなんでしょうか」

「ロキを知ってるかな？」

「あっはい！」

あの「彼氏にしたい魔導士」ランキング上位をキープしているあの
ロキ様ですよね！」

「ああそのロキだ。」

でそのロキに会い「会いたいです！」そうかじゃあこの日にフェア

リーテイルに来てくれ。

あつあとちゃんと挨拶する時は“星霊魔導士”の　ですと言ってくれ。」

「えっ？何故ですか？」

「ああその時のイベントみたいなものさ。じゃあ頑張ってくれたまえ。

あつあと周りの人に聞いてはいけないよ。

そういう主催だから。」

「はっはい！わかりました！」

そう言った後ローブを被ってる男は女性の前から去って行った。

.....誰もいないな。

そう男は心で呟いてローブを脱いだ。

ふう結構疲れるな、さて・・・これで32人目がククク。

明らかに小物臭がする笑いをしている男は。ククク、ロキてめえが悪いんだぜ？。

俺いや俺達の前でイチャイチャ、イチャイチャとしてるから。

そう心で言う黒髪の男は言った。

というかジェットであった。

確かあいつは星霊魔導士の女性が死んだのは自分のせいだと悔やんでるからな。

今しかない弱点をつかせてもらう。

「クククク、ハアハハハハハハハ！！！」

ジェットは笑った後ローブを被り直し女性に近付いた。

この男クズすぎである。

だがもつとやれ（by 糞作者）。

さてあらかた女性をキャプチャーしたしさっさとクエスト終わったとギルドに伝えるか。

それにしてもまさかこうも上手くいくとは思わなかった。

やはりイケメンかケツ。

そう俺が考えながら走っていたらもうギルドの前まで付いていた。

もう付いたのか、考えてると時間経つのは早いつて聞くが本当だな。

扉を開けてさっさと伝えるかと決め扉を開けた。

「・・・ジェットか」

俺の前に魔王がいた。

「お前も来てくれナツ達がS級魔導士にもなっていないのに行った。それを止めに行ったグレイも戻ってきていない。さっさと連れ戻してマスターに処分を決めてもらう。」

そうエルザ（魔王）が言った。

もちろん俺の答えは。

「わかった」

いや断るの無理だから。

おい同情な視線送るな。

なんならお前が変わりに行くかと視線を向けたが周りの奴らは視線をそらした。

ナツ達の野郎なんてことしやがる。

どうしようとお前たちの勝手だが俺に迷惑かけんじゃねえ！。

さっさと連れ戻してやる。

怖いんだよ今眼の前にいるお方は！。

その時いたギルドにいる連中共は。

「さっ最強（最恐）タツグができちまった」とエルザの怒っている低い声とジエットの無表情の怒り様（エルザが恐い＋ナツ達の恐ろしい置き土産（エルザの怒り））に恐怖し失神した者、狂乱した者多数いたという。

この時の状況を“絶対に怒らせちゃ駄目な奴らを怒らせちまった奴らに怒りと生きて帰って来い”の事件簿にギルドにいた奴らは忘れたくても忘れられないと記憶させられた。

俺は恐怖しながら、港町ハルジオンに付いた。

「船を借りるぞ」

「ああ」

声が！声がマジ恐いのレベルを超えてる！！。

くそナツ達まじ許さねえ（お前の声も今充分恐い事になってるがなby 糞作者）。

俺達は小舟を借りてガルナ島を目指した。

なぜか小舟借りる時エルザを恐がるのはわかるが、なんで俺見る時いきなり倒れて気絶したんだ？。

「私も漕ぐのを手伝うか？」

「いや、いい」

漕いでごまかしてるんだからな。

そう俺が漕いでいて少したった後だろうが、船が近づいて来た。

「船長！女と男がいますぜ！」

「ガアハハハ！よしてめえら！そいつらの金と物を盗れ！」

「へへへ船長、女を生け捕りにしやしょうぜ！」

どうやら海賊らしい。

ただどこいつらは運が悪かったな。

いつものエルザならいざ知らず今のエルザは。

「ちようど良いあいつらの船で行くとしよう」

知ってるか？魔王からは逃げられない。

それにとびっきりの美女だとさらに逃げ場はなくなるのさ。

まあ結果はわかりきっていて海賊はボコボコ以上に酷い状況になった。

「あつあんな島になにしに行くつもり・・・あ！
ですか？」

船長が途中で敬語になった。
なって仕方ないけどな。

「いいから舵をとれ」

「ひいい」

エルザの命令で、船長は小さい悲鳴を上げて前を向いた。

延びてた奴らも目を覚ました。

・・・顔が腫れてる。

「なあ、本当に勘弁しろ！あつゝしててくださいよ」

「ガルナ島は呪われた島だ、

噂じゃあ人間が悪魔になつちまうって・・・」

「興味がない」

「あゝそうですか」

バツサリと切りました。

容赦ねえ。

まあこれが普通なんだろう（えっ？）

「掟を破った者をシオキに行く。

ただそれだけだ。」

「カツコイイ！」「ステキです！」「いきやしょう！姉さん！」

どこまでも付いていくっすゝ！」

さっさすが、妖精“女王”異名を持つてるだけある（汗）。

「うむ、急いで」

《あいやいさあ！（ハート）》

「ああ！わしも！わしも！混ぜてくださいお姉様」（ハート）

おっ恐ろしい支配力。

一気に海賊共が豚に変わりやがった（汗）。

海賊共はさっきまでのペースが嘘のように一致団結した。

俺は何もせずラグナ島に付いた。

「ナツ達を探すぞ」
「ああ」

俺達はナツ達を探し始めた。

お互い無言で、すっごい気まずい雰囲気だ。

崖の下を見てナツ達いなかなあと思つてたら。

・・・いた。

ルーシイだ、デカインズミがルーシイに“のしかかり”しようとしている。

エルザに伝えようと見たらいないって！？すでにネズミに攻撃していた。

ルーシイがエルザに話さうとしたが、顔が真っ青になった。

怒りが爆発寸前ぼっい。

エルザの後ろからハッピーが来たがエルザを見た瞬間音をたてずに瞬時に飛びとんだ。

甘い！逃がすか。！

ラディカルグットスピード！。

お前もエルザの怒りに触れるがいい！。

ハッピーの飛んだ方角から、おもっいきり飛びハッピーの尻尾を掴んで真下に落ちていく。

「うわああああ！？」

ハッピーも急に落ちていくのに気づいたのか悲鳴を上げたが、もう遅い！。

ドゴオン！

土煙を上げ砂浜から立ち上がってエルザ達のところに歩いていく。

「ジエ、ジエツト!？」

ルーシイが声をあげてるが無視し。

「ハッピーが逃げそうだったから、捕まえておいた」

「そうか、お前を連れて来て正解だった」

エルザが「無表情のまま振り向いて言い。

ルーシイに顔を戻して。

「ナツはどこだ？」

「ちよちよつと聞いて!。」

勝手に来ちゃったのは謝るけど、今この島は大変な事になってるの
!。」

エルザが無表情のまま聞く。

「氷付けの悪魔を復活させようとしてる奴らがいたり!。」

村の人達はそいつらの魔力で苦しめていたり!。」

とにかく大変なの!。」

私達なんとかこの島を救ってあげたいんだ……」

確かに普通の奴らなら手伝うだろう。

俺だってそうするかもしれない。

だけど、それは“普通”の奴らの場合だ。

「興味がないな」

「じゃじゃあせめて最後まで仕事をひゃあ!」

ルーシイの胸の前にエルザは剣を突き立てた。

「違うぞルーシイ貴様らはマスタを裏切った。

ただで済むと思つなよ。」

はははは……普通に失神するわ。

ルーシイ今怖いと思ったな。
なぜ解るかって？。
俺も怖いからだよ！。

その後ルーシイ達に案内してもらい、村のテントでナツ達を待っていた。

「テントの向こうで待ってますよ」

「おう悪いな」

この声はグレイだな。

て事はリオンに負けた後か。

グレイがテントに向かって来る。

3

2

1

「遅かったなグレイ」

すごいドスの声だ・・・逃げたい（涙）。

「エルザ！？ジェット！？」

「ルーシイ！？ハッピー！？」

「だいたい事情はルーシイに聞いた。」

その後エルザの説教が続いたがグレイが反抗して敵のそこに向かった。

・・・グレイお前も命知らずだな、いや知ってるから余計に質が悪

い。

エルザがルーシィ達にむいて剣を上げて

「ちよお！エルザおっ落ち着いて！」

「昔の友達に負けて気がたつてんだよ！」

ルーシィとハッピーの言葉を無視して、ルーシィ達のロープを一閃して斬った。

「これでは、話しにならんすべては仕事を片付けてからだ」

《エルザ！》

ルーシィ達は嬉しそうに言ったが。

「勘違いはするなよ！」

罰は受けてもらう！」

《はあい》

なんだかんだで優しいんだな。

「結構、心配性なんだな」

「ふん、勿論お前にも手伝ってもらおうぞ」

いや本当はさっさと帰りたいけどね。

・・・後が恐いし。

グレイ達と走りながら遺跡が見えたんだが。

「遺跡が傾いてる？」

ルーシィが言う。

いや、これはどう見ても

《ナツだな》

ルーシィ以外が呟いた。

「どうやつか知らねえが、こんなデタラメな事するのはアイツしいねえ。」

狙ったのか、偶然か・・・どちらにせよこれで月の光はデリオラに当たらねえ。」

「あちこち壊しちゃうクセがこんなところで役に立つなんて・・・」

「オイラ知ってるよ。そおいうのふくせんんっていうんだよおっ！」
ハッピーが自分の首を傾けながら言ったって。

今ボキッつたぞ（汗）。

見計らったようにチャクラム見たいなのが飛んで来た。

「危ない！」

エルザがルーシィ達を殴り飛ばして避けた。

俺はあらかじめ飛んで来たのを見てからエルザのパンチも避けた。

「見つけたぞ！フェアリーテイル！」「零帝様の邪魔は許さん」

「こいつら・・・」

「リオンの手下か！」

「囲まれちゃった！」

「ああい」

グレイ、エルザ、ルーシィ、ハッピーが言う。

「ここは、俺に任せてもらおう」

ここにいた方がなんとなく安全だと俺の感が言っている！。

「ジェットー！」

「さっさと行け」

こっちの方が生存率が高い。

「私も残ろう」

えっ？ちよ！？。

「エルザ」

「行けグレイ、リオンと決着を付けて来い」

「大丈夫！あたし達もいるから行って！」

「ああい！」

「……………俺なんかカツコ悪い（はじめからだよ）」

あれから何十人倒してんだ。

もうすっかり夜だ。

やっぱりエルザ達が残って正解だ！。

俺だったら絶対逃げてんな！。

「ルーシイ気づいているか？」

「うん、これだけの人数なのになんか魔力が弱いつていうか……………
そりゃあ、あなた達基準ではそうなんでしょうね。」

「そうだ、まともな魔導士は5人程しかいないようだな」

「やれやれ、これじゃあ本気出せないネ」

「あんたが言うセリフかい？」

ここに居る奴ら全員殺してもいいんだけど、俺はそんなに銃使いた
くないんだよなあ。

ぶつちやけグロすぎてあんまり使いたくねえ。

「そういうわけだ頼めるか？」

「任せて！」

ルーシイが懐から鍵を出して

「開け！巨蟹宮の扉！キャンサー！」

……………美容師風の男で蟹の脚付けてるだけじゃん。

「ん？君は確か……………」

エルザが美容師風の男を見て思い出そうとしている。

「エルザ様、なんなりとお申込み下さいませ・・・チヨキ」
チヨキのところでエコーが付いているような気がするんだが・・・。

「様って何!？」

しかもチヨキって!？」

しかも呼んだのあたしなんですが!？」

「ツッコミすぎ」

エルザの女王オーラーは星霊すらも豚に変えるか。

・・・胸熱だな。

ハッ!？俺は何を考えてたんだ。

いかんいかん騙されるなジェットよ!？。

「とにかくあいつらを戦闘不能にして!」

「オーケーエビ・・・チヨキ」

うぼあ!？。

ちよ!？そこは!？。

ラツラメエ!。

もっもと切って!!ハアハア。

おい待て変なのがいたぞ!。

その後手下にも止められたが、事情を聞いてみると。

リオンが仇のデリオラを倒してくれと言っている。

だが、そんな危険なことは止める。

ただど大人間の魔力でデリオラが復活したが、もうとっくに死んでいた。

グレイとリオンは和解したそうだ。後はナツ達が呪いを解くだけ、

いや思い出させるだけか。

この島の住人は“元々”悪魔だからな。
そう考えてたら島に覆われた結界を破った。
・・・あいつらマジチートすぎだろ。

ん？俺は手伝わないのかって？。
俺が受けた訳じゃないし俺がいなくても結界は破れるしな。

フェアリーテイルのジェットという人物ではなく俺というジェット
はいなくても何にも変わらないだの“イレギュラー”だからな。
だから、“イレギュラー”だからこそ原作も多少変わるだろう。
というかわわっている。

“俺”がガルナ島にいるからな。

そう俺が自分自身へと問い詰めているとナツ達が帰ってきた。

「よっしゃあ！さつさとギルドに帰るぞお」
ナツがハイテンションで言う。

「はあ、やっと帰れる」

「だが、どうやって帰るんだ？」
グレイは返す。

「ああ、それなら大丈夫だ」

まあその間にいろいろあったが俺は面倒だったから無視しとく。

ああやっと帰れる。

「ああ、お前達罰は忘れるなよ？」

《げえ！？》

頼むから無表情にならないで！ドスの効いた声出さないでくれ！。
心臓が止まるから！？。

やな事の後には、やな事（後書き）

書くのが遅い・・・チクシヨウ。

ラーメン美味しいです。(前書き)

「あれ？」

『どうした？』

「なんか少しラブコメな感じが出来ただけど・・・なぜ？」

『えっ俺ラブコメ好きなんだけど』「えっ？」

『えっ？』

《えっ？》

ラーメン美味しいです。

景色を見る。

澄みきった蒼い空。

俺にとって、さっきまでの不眠不休に等しい戦闘（殺されかけた）はさっきと違って穏やかだ。

今は俺達を襲った海賊達（エルザが一方的までにボコッタ）の船で港街ハルジオンの港に向かってマグノリアにあるフェアリーテイルにナツ達をガルナ島の件を済ませてから（マスターの嫌がらせの罰のために）連れ戻しているところだ。

ああ〜それにしてもさっきまでのが嘘のように平和だ。やっぱり俺はこうしてゆっくりしてる方がいいわ〜。

オエエエエエ

それにしてもよく俺生きてたな、
やっぱり俺戦闘駄目だわ。

こーおなんていうの？。
戦闘センス？そういうのまったくくない。（あるから生きてんだろっ
が）

というか俺の手札が速くなる魔法、ラディカルグットスピードが速くなるだけだし。

まあそりゃあ殴るとまったく相手あんま痛そうじゃないし（違いま

すこの世界の住民がおかしいだけです。普通なら結構痛いから。あゝでもやつぱ蹴ると効果ありつぽいんだよな（はつきり言うがお前の蹴りはヤバいから）。なに？クーガ兄貴補正？・・・ありえるな。

あとは神様からもらった魔法型銃もとい。

over protective gift（過保護な贈り物）これはさすがにやり過ぎじゃね？ってぐらいの性能だがはつきりいつてこれヤバくね？。

まあもう一つ隠し玉あるけどこれは一生使うことはないだろう（フラグ）。

まあその他もろもろあるが。

あれ？俺の手札少なくて？。

オエエエエ

自分のあまりにも戦闘の道具・スタイルの少なさに絶望して結論が出た。

いやほらなんか俺ツイー！！みたいなチートはつきりいつてまったくなくね？（充分チートです）。

自分自身のヤバさに気付かず勝手に自己完結するジェットであった。

あゝそれにしてもまだ着かないのか。

・・・暇だな。

そう俺は退屈だったので他の奴らは何をしてるのか見て見ることにした。

エルザのぶっ……もとい海賊の船員達を見る。

船員達は一致団結して真面目すぎるくらい動いている。

……何人が違う意味での息が荒い奴らがいるが。

次はナツ達を……

「オエエエエ！」

ぎぼぢわるい」

「ああ！もう船の中で吐かないでったら！」

「あいつ」

ナツがゲロを吐いててルーシィがナツを海のところで吐かせる。
……ハッピーさんお願いですから黒い顔やめてください。

なんかあいつらの光景を見ると。

アレ？可笑しいななんか敗北感がすげえ来るんだけど。

あいつらを見るのはヤメだ！。

こっちがなんか死にたくなる！……爆発しろ（爆発しろ）。

次はグレイを見る。

……

「グレイ服着ろ」

「おわあ！？」

もうあいつは駄目だな。

「グレイ様・・・なんて麗しい肉体ハート」
・・・グレイ君のことは忘れないよ。

よしもういないな！ないったらない！。

「・・・ジエツト」

「・・・なんだ？」

すみません忘れてわおりませんエルザ様。
忘れたかったのですが無理ですかそうですか。

「いや・・・すまない」

彘？

「よく考えたらお前は依頼から帰って来たばかりだったのに、無理を言わせて連れて来てしまったな。」

えっ？誰この娘さっきの不機嫌な無表情or声だったのになんかすまなそうな顔と声してんだけど。

「すまなかつた」

ちよっ、頭下げないで後で怖いから！（エルザ様ファンクラブ後はわかるな？）。

「別に気にしなくていい・・・仲間だろ？」

はい私はポツチはもう二度と嫌です。

「」

「・・・どうかしたか？」

エルザの表情が驚いた表情をしたのでなんか可笑しなことをしたか？と聞く。

「いっついや意外だと思ってな」

どゆこと？

「お前はフェアリーテイルに入った時からずっと・・・なんといふべきか皆と線を引いた状態（対人恐怖症その他もろもろ）だったからな。」

えっ？そんなつもりないんだけど・・・（対人恐怖s何度も言わせんな）。

「そうだなかつての私・・・いやミストガンと同じ感じか。」

いやあんなずるい杖ないから。

「・・・」

俺が黙ってるのを見たのを確認したのかエルザは話を続ける。

「正直にいうが私はお前が怖い」
バツサリいったなオイ!？。

俺はこの言葉にショックを受けてエルザの言葉をよく聞いていなかった。

えっ？怖いキモイ？。

えっ？ひどくない？。

いやいやいや！よく考えろ！ジェット！俺が気持ち悪がれてるのもなにか原因があるはずだ！。

まさか俺がエルザの愚痴を心の中で呟いてたのを実は声に出しちゃつてた!？。

いや！それなない！エルザは悪い意味でも善い意味でも真っ直ぐだ！ドストレートだ!。

ん？もしかこれはエルザなりの忠告では？。

あり得るあり得る過ぎる。

エルザは姉御（女王様）肌だからもしかしたら俺の悪いところを気づ

かせる為？。

なっなるほど（汗）。

確かに俺は根暗（雰囲気怖し）で眼付きも暗いし（だいたい同意だが瞳が怖がられてる）そんなに喋ってない（勘違いはさらに深く原因）。

だけどもまん・・・エルザ。

俺はそう変わる程出来た人間じゃないんだ。

「・・・・・・・・すまない」

俺はエルザに自分の不器用さに謝った。

「・・・いや別にいいさ」

エルザは悲しそうな顔で言う・・・後がマジ怖い。

「それにお前の真意も少し分かったただけでも充分だ」

そう言った瞬間エルザは小さく笑った後エルザははまだナツ達のゲロを吐いてるところに歩いていった。

・・・あれは少し卑怯だな小さく笑うって。

ああ昔の俺なら惚れてたな。

俺は彼女を振り向かせれないだろう。

それにそれはリア充、イケメンの特権でしょ？。

「うはっwww姉さんまじテラ萌えす！www」

「キヤヤアアア！素敵抱いて！！！」

「ちよっwwwワシ男なのに濡れたんじゃけどwww」

「旦那あんたもすみに置けないねwwwこのこっすいませんすいませんちよっしこきましたゆるしてください」

「てめえなにやってんだ！死にてえのか！」

「あやまれ！あやまれ！すいません旦那こいつ頭がアンポンタンなもんで」

「てめえ！いい度胸だな！コラ！」

船員と船長が変なテンションで興奮して来た一人が話しかけて来たのでそいつを見たら謝って来た（自覚なし）。

「てめえら！いいから土下座だ！」

さっきまでの雑草が生えた声がなくなり船長らしい声になった後。

《すいませんでしたー！ー！ー！！！》

船長、船員全員が同時に土下座した。ってこついつ時は息会ってるな。

まあ

「いいからさつさと持ち場に戻れ」

空気は読む物じゃね？。

《サー！イエッサー！》

side out

side エルザ

私達はナツ、ルーシイ、グレイを連れ戻しに向かったのだがなんだかんだで結局ガルナ島の件を片付けてしまった。

ジエットの言ったことを思い出す。

ああ確かに私は肝心なところで甘いのかもしれん。

私は港に付くまでの間、暇だったので皆の様子を見ることにした。

船長と船員達を見る。

彼らは海賊とは言えないぐらい真面目に動いている。

どうやら私達を港に届けた後全員で漁師になるらしい、それはいいことだ。

それとよく分からなかったが「あなたの専属の豚に・・・」と小さい声で聞こえなかったが聞かない方が私の為だと私の勘が告げていたので聞かなかった（ちっ）。

ルーシー達を見る。

良く考えたらあいつら（えっあたしも入ってるの！？byルーシー）はロクな事はしないがちゃんとやることはキツチリやるから私個人としては好ましい。

・・・まあちゃんとマスターに処罰は決めてもらうが。

・・・あとグレイ。

「グレイ服着ろ」

「おわあ!?!」

私が注意しようとしたが先に言われたようだ。

私は少し苦笑しながらその注意した人物に近づいて。

少し間を置いてから。

「・・・ジエツト」

「・・・なんだ?」

ジエツトは私の眼を見て聞く。

ジエツトの茶色がどこまでも光がない暗い眼に少し魅入ってしまった後ハツと私は本題を話さなければならぬと話そうとした。
私はず話さなければならぬことは・・・。

「いや・・・すまない」

我ながらへたな謝りかただと苦笑する。

ジエットはよく理解できないという雰囲気だ。

さして顔は相変わらずの無表情で変化はないように見えるがギルドの皆も雰囲気で彼の変化に気付くようになった。

「よく考えたらお前は依頼から帰って来たばかりだったのに、無理を言わせ連れて来てしまったな」

あの時の私も血が頭に昇りすぎて周りがよく見えなかったからなんだが、今思うと大人げなかったと反省している。

私の今後の課題は冷静さだろう（無理じゃね？）。ジエットは服が汚れてるに反して大した疲労はないようだが（めっちゃ疲れてる）

「すまなかった」

私は頭を下げる。

私が頭を下げたくすく。

「別に気にしなくていい・・・仲間だろ？」

「」

「・・・どうかしたか？」

ジエットは少し困惑した表情で聞く。

「いついや意外だと思っただけな」
本当に意外だ。

まさかジエットの本音が聞けるとは。

「お前はフェアリーテイルに入った時も・・・なんというべきか皆と線を引いた状態だったからな」

今では口を聞く程までにはなっているが、入った頃は本当に喋ることすら、居ることすら不要というべき姿だったから（ボツチ（とジエットが一方的に決めつけている）の悲しい性）。

「そうだなかつての私・・・いやミストガンと同じ感じか」

いやミストガンの姿は臍氣にしか見たことはないがミストガンは己を見せてはならないと脅迫してみた思いが僅かながらそう感じた。

だがジエットはどうだ？。

わからない。

「正直に言うが私はお前が怖い」

そう目の前に居るジエットという人間がわからない。

わからないから怖い。

ジエットがどういう人生を送って来たかは私は知らない（ほぼ自己鍛錬という名のニート生活）。

私も多少は厳しい生活をした。

いや奴隷の生活だった。

今私がこうして無事なのはジェラルル・・・いやこれは言い訳だ私

は逃げたと同じだ。

だから私はジエットの目を見て思う。

私はあれほど絶望しきって世界を怨んでる目を知らない。(そりゃああんな仕打ちされればね。)

20も生きてない今日の前にいる人間のする目じゃない(転生前と現在の歳を足してみよう)。
確かに私は腐る程そういう目をしている人間も見てきた。だからだろっ彼ほど絶望しきっている目は知らない、いやそもそも彼以上の人がいるだろっか?。

だから

「ギルドの皆はもっとお前の事を知りたいと思っている。
いや私も知りたい」

だから私はジエットの本心を知りたい。

彼の返事を待つ。(あれ?この文どこのギャルゲ?)

「……………すまない」

「……………いやいいさ」

確かに少々……………いやかなり残念だが。

「それにお前の真意も少しわかったただけでも充分だ」

ならこれからわかっていけばいいことだ。

私はジエットのよく理解していない表情を見て。

なんだそんな顔も出来るじゃないか。
少し笑った後ナツ達のとこに歩いた。

「ハアーナツ！お前はまだ吐いてるのか。よし！私が直ぐに楽しんでやる！」

ラーメン美味しいです。(後書き)

遅れて申し訳ありません。

だけどもあんま見てないから大丈夫ですよね？

『もう同じネタやめろっざい』
えっ？ちよっ

ギャアアアアア！！

『遅れて誠にすいません作者は文字通り糞作者ですので遅れまくり
ます。どうかお許し下さい』

涙が勝手に出やがる（前書き）

すいませんでした。

今回は真面目に酷い駄文が出来ました。

それでも見る方は心を落ちついて生暖かく見てください。

本当にヤバい駄文が出来たからです。

涙が勝手に出やがる

「ん〜帰って来たぞ〜！」

「来たぞ〜！」

さっきまでの嘔吐の繰り返ししてたナツも乗り物から出るとこれだ・
・。

そんな俺の耳がキーンとする程五月蠅いナツとハッピーはテンションが高い高すぎる程だ。

ちなみにエルザのbげふんげふんは漁師になるそつだ。

というかアレだ漁師舐めてんのか？海賊共は？。

漁師の方が海賊よりすっげー大変なんだぞ。
素直に店とかで働け。

ちなみに追記すると 그레이の尻は無事だったと記しておく。

ナニが無事だったかって？文字どおり尻が。

こんなしょーもない考えをしてた俺に。

「しっかしあれだけ苦労して報酬は鍵一個か…」

「せつかくのS級クエストなのにね」

グレイが愚痴るのをハッピーが返す。

いやいやだいたい元はといえば。

「・・・お前らが軽率な行動をしたからあーなったんだろっが・・・」

シーーーーーン

こんな感じだろうか。

俺もグレイと同じように愚痴ると皆が急に沈黙する。

「せつ正式な仕事ではなかったんだこれくらいが丁度いい。」

「そっそうそう文句言わないの」

エルザが最初どもりながら話し。

ルーシイも最初どもりながら言う。

長く船居たから疲れてるんだれう。

それにナツとハッピーにグレイが大変だったからな（ナツ〓嘔吐

ハッピー〓悪乗り

グレイ〓脱ぎ癖）

「得したのルーシイだけじゃないか」

ハッピーが不満顔しながらルーシイのところに羽を生やして飛び。

「ズルイよソレ」

「何てこと言うドラ猫かしら！」

ルーシィとハッピーがもう漫才の様にすらすらと言っ。
ボケとボケの感じだが。

「前にも言ったけど金色の鍵・・・黄道十二門の鍵は世界中にたった十二個しかないの！
めちゃくちゃレアなんだからね」

説明口調で黄色の鍵の凄さを話すのはいいのだが、悪いルーシィま
つたく凄さがわからん。

いや確かに星霊が強い弱いが能力が強いと各様々な事は分かるが。

俺のイメージは凄く魔力が減るが強い星霊つと悪いイメージしかない。
い。

要するに魔力が大量になきゃ使えない魔法みたいな物だろう。

だからルーシィの魔力の凄さが分かる。

まあほとんどの奴らは普通にそれぐらいの魔力があるんだろう。

「へへッあの牛やメイドが？」

「あたしがもつと修行したらあんたより星霊の方がずっと強いんだ
から！」

夫婦漫才の様にナツが茶化し、ルーシィがムキになって言う。

・・・こいつら真面早く結婚しろ。

てかこれ以上星霊が強くなるって真面震えてきやがった(汗)。

「で？今回貰った鍵はどんなのなんだ？」

グレイが振り向きルーシイに聞く。

「人馬宮のサジタリウスよ！」

親指立ててルーシイが言う。

「人馬だと！こんなのか！？」

「いや〜こんなじゃない？」

グレイとルーシイが何か電波を送っているが。

「・・・馬でも人ですらないよ・・・それ・・・」

ナツの人馬のイメージをルーシイがつっこむ。

こいつらエスパーか！？。

「呑気な事だな」

でかい荷物の荷物車を止めエルザが喋る。

「まさか帰ったら処分が下るのを忘れたわけではあるまいな？」

《げっ》「処分!？」

「ちよちよつと待ってそれってお咎め無しになったんじゃ・・・」

今頃思い出したのか。

いや忘れようとしてたのを俺、エルザに詰め寄りながらルーシイが言う。

「馬鹿を言つな」

エルザが一喝し。

「お前たちの行動を認めたのは悪魔で私達の現場判断だ」

あれ？俺何も聞いてないけど。

俺の心の呟きが聞こえるわけもなく。

「罰は罰として受けて貰わなければならん」

《えっ》「そっそんな」

ルーシイ達はうなだれる。

が

「私は・・・今回の件についてはおおむね海容してもいいと思っている」

エルザの言葉にルーシイ達は明るい表情になる。

「しかし判断を下すのはマスターだ私は弁護するつもりはない
覚悟しておけ」

おっ恐ろしい相手に希望を上げて相手に心の余裕が出来たとことを一
気に絶望に叩きこむとは(汗)。
俺はエルザの才能に恐怖しながら。

「まさか“アレ”をやらされるんじゃない」

ハッピーの悲痛な声と共にナツとグレの顔が汗だくになる。

「ちよと待て!“アレ”だけはもう二度とやりたくねえ!」

グレイは“アレ”を思い出したのか頭を抱える。
そんな急激な変化の様を見たのか。

「“アレ”ってなに!?!」

“アレ”のことが分からないから余計にルーシィは体を震わせる。
ちなみに俺もどの“アレ”かがわからない。

「きつきにすんな!よくやったって誉めてくれるさじっちゃんなら
!」

「すぐぶるポジティブね・・・」

ナツのポジティブさにルーシィは少し震えが止まるが!!!。

「いや“アレ”はもうほぼ決定だろう
腕がなるな?」

ふふふ「エルザの容赦ない宣告にナツは笑顔のまま汗だくになり。

「いつ嫌だー！ー！！」

ナツが逃げようとするがエルザにすでに型袖を掴まれズルズル引きずられる。

「“アレ”だけは！“アレ”だけはー！嫌だー！！」

ナツの怯えように

「だから！“アレ”ってなんなの！？なんなのよー！！！！」

ルーシイは“アレ”はなんなのか聞こうとするが誰も答えない。

マジに“アレ”ってなんだ？。

ナツはなんとか逃げようとするがエルザ（妖精“女王”）（ティターニア）に掴まれてるので無駄だ。

「そつだ！」

ハッピーが何か思いついたのか声を上げる。

俺とエルザ以外はハッピーに何か活路を思いついたのかと顔を向ける。

「ジエツト」

まさに猫なで声でハッピーが近づく。

「僕達を弁護して～お願い！」

俺に言いやがった。

罰を受ける組は希望を見る目で訴える。

ヤメロ！そんなキラキラした目で俺を見るな！。

俺はその眩しさに少し目を細めながらハッピー達の願いを聞き入れ
そうになったが。

その後の未来の映像が見える。

俺の本能が言っている！。

聞き入れては俺が死ぬぞ！と。

まあエ ザさんの視線が恐ろしいので。

「・・・甘えるな」

断ることにする。てかエルザの目を見たら無理。

あれ絶対“受け入れたらどうなるかわかってるんだろっな？”て目
してんもん！（勘違い。

どう答えを返すのか見ただけです。）

「ちゃんと罰は受けてもらっつ」

俺は皆の視線（対人or視線恐怖症ON）に恐怖しながら一足先に
ギルドに歩いた。

ジェットが先にギルドに向かった後の連中共は。

「ねえ」

《何だよ（何）？》

ルーシイが声を出しナツ、グレイ、ハッピーが声を返す。

「あたしさエルザがすごい怒ってたと思ってたんだけど実はジェットのの方がすごい怒ってたんじゃないかと思うんだけど・・・」

ルーシイの（間違った）問いに。

《ああ（あい）怒らせちゃいけない奴を怒らせちゃった（ちゃった）ね》

同時に息びったりと言つのであった。

「一見おとなしい雰囲気、奴を怒らせたら一番怖いというやつか？」

天然に返すエルザであった。

一足先にギルドに付いた俺は中に入った。

「ジ、ジェットかどうだった？」

ドロイが話しかけ連れ戻せたかと聞く。

「問題ないすぐ来る」

休みなしで動いて疲れてるので結果を言う（あんまり変わってない）。

俺はミラジエーンちゃんの所に行き。

「・・・酒を頼む」

「ハーイ！」

もう酒を飲まなきゃやってられない（駄目人間）。

「お疲れ」

向かいの席にドロイが座る。

「ああ」

「で？帰りが遅い感じだと結局手伝ったてどこか？」

「いや俺は何もしていない」

謙遜じゃなく本当に何もしてないから困る。

「ハハハお前はまったく変な所で」

何か分かってますよな答えに戸惑う俺に。

「よおジェットたまには休め休め体壊れちまうぞ」

「お前と一緒にしてやんなよ失礼だろジェットに」

「何だと!？」

全員とまではいかないが少人数席に座って話しかけてくる。

「ハイハイ!酒一丁!」

ミラちゃんが酒を運んで俺のところに置く。

「あ、俺も!」「俺も酒!」「俺も」

「ハイハイ」

酒を次々と俺の席に座ってる他の奴らが頼む。

そんな光景に目を細める。

「どうかしたのか?」

ドロイが俺に聞く。

「別にただ・・・」

「ただ?」

ドロイの返しに俺の気のせいかも知れないが他の奴らも聞き耳して
るような気がする。

いや自意識過剰だな。俺が答えようとしたときに。

ピキーン！

とニュータイプのように頭が響いた。

俺は酒を一气飲みにし。

「悪い用事が出来た」

ギルドに出て“とある場所”に向かって外に出る途中に。

「ん？ジェットかどこか行くのか？」

エルザ達が丁度帰って来た。

「いや少し・・・な」

答えを誤魔化する。

「・・・お前は、またかそう働きすぎると本当に体壊すぞ」

「えっどこ行くの？」

エルザがよく分からんことを言ってるのをルーシィが問う。

「ハア、ジェット“依頼”に行くのはいいが働きすぎだぞ」

グレイがため息をつきながら言う。

「え！また行くの！？」ルーシィは声を上げる。

いやいや行かないから。
用事すませたらすぐ帰って寝るだけだから。

「すぐ（用事済ませて）帰る」

エルザ達の横をすり抜けある所に向かった。

その後ナツ達一行はジエツトは依頼に向かったと思い（勘違いし）連れ戻そうとしたが今から行ってもジエツトはいないと思いギルドに入った。

またこれによりギルドの皆のジエツトのイメージ象が勘違いされるのであった。

その後すぐ、ナツ達の入替わり騒動が起こるのであったがそこにジエツトは勿論いないが一定のある“共通点”の男性がいないのであった。

オマケ

これはある世界から物理法則を無視して来た男（変態）のお話である。

ある一人の男の話しましょう。

フェアリーテイル所属アルザック・コネル。魔法は銃に魔法の弾を装填する魔法だがそんなことは今必要じゃない。
というかそんなこと今は必要ない。

そんな男もある暗闇の所で簞巻きにされていた。

「諸君、ここはどこだ？」

一本の蠟燭が暗闇の明かりを灯す。

その男の問いに

《最後の審判を下す法廷だ！》

アルザックが簀巻きにされてる少し離れてるところに一斉に蠟燭がともり黒いマスク、ローブをかぶっている集団が顔を出す。

「んー！んー！」

アルザックは恐怖したのか声を上げてるが口に猿轡を付けられているので何を言ってるのかが分からない。

それを無視して黒いマスクを被っているリーダーらしき男が

「異端者には？」 《死の鉄槌を！》

黒い集団が声を上げる。

はつきり言って怖い。

「男とは？」

《周りを蹴散らし、愛に生きる者！》

黒い集団の答えに満足したのかリーダーの男は。

「宜しい。これより・・・異端審問会を始める」

黒いマスクリーダーの男は

「罪状を読みたまえ」

「了解」

巻物を広げ

「被告人。

アルザック・コネル。

アルザック氏を甲とし、ビスカ・ムーランを計とします。」

言葉をいったん止め

「甲は我らが背信行為であり。

本日早朝、甲が計に強制わいせつ行為をしていたところを我らが同胞が確保。今後、甲と計の関係を充分調査し。

甲に叱るべき措置と計の監視を「結論だけをのべたまえ！」

我慢をきらしたのかリーダーが怒鳴る。

その答えに。

「キスをしていたので羨ましいでありますう！」

かなりの迫力のある声で巻物を読んだいた男は喋る。

「判決。死刑」

0 コンマすら生ぬるい早さで判決を言う情けないジエじゃなく男。

「んー！ぶはっ！いつ異議あり！」

口の猿轡を無理やり外したアルザックが異議を言う。

「何かね被告人」

「なっなんで僕とビスカがキスしたなん「死刑。さっさと例のと」へ連れて行け」

キスを知っているんだ？だろ充分わかるとも。

別に殺すわけじゃない。

ただ素直にするだけさククク。

「諸君。我らは何ぞや？」

《愛を憎む者！愛を欲する者！》

「諸君。愛とはなんぞや？」

《周りを蹴散らし手に入れる者！》

俺は立ち上がり。

「諸君！淡いリア充、カップルは！」

《殺せ！殺せ！殺せ！》

「ならばあー！」

腕を振り上げる。

「我らのタブーは！」

《うら若き乙女の不幸！》

「ならば！ならば！その乙女の幸せが他の男でもか！？」

俺は俺達にとって酷なことを問う。

《それが乙女の幸せならば！》

「よろしい！諸君私は汝らが軽蔑されようとも！私は諸君らを尊敬している！」

「私達は野郎の為にやっているのではない！乙女の為にやっていることを忘れるな！」

《JA！》

「ハッ！」

俺は飛び起きる。

周りを見る・・・俺の部屋・・・なんだ夢か。

俺は立ち上がりまだ入っていない風呂に入りに行く。

だがその時気がつけばよかったのだろう。

マスクの存在に。

そのマスクは霧のように消えた。

もしかするとあなたも知らない内に……。

まあそんなことはないがな。

そう心で呟き風呂に入りに行く。

あゝ眠い。

涙が勝手に出やがる（後書き）

直すつもりはありません。

というかこれが私の実力です。

あれは夢か？現実か？それとも・・・（前書き）

「俺はリンクスだ」

「ゲイヴンに掘られちまえ」

あれは夢か？現実か？それとも・・・

カポンっと

風呂の桶が風呂場に響く。

ああ〜やっぱ1日一回風呂に入らなきゃ駄目だな。

体中が痒くなるとくに頭が。

「・・・それにしても」

さっきのことを思い出す。

俺が“あの場所”（強制的）に向かって“ここでは”数時間の出来事でも。

“あの場所”では数週間程の体感だった。

数週間も飲まず食わずだったら俺は衰弱死してる筈だ。
というかその自信がある。

ならなぜ俺は生きている？
やはり数時間かそこらだったのか。

だが疑問はまだ腐る程ある。

自分の手を見る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

グーパーグーパーっと自分の手の調整を確認する。

「っ！」

やはりだ。

勘違いであって欲しかったが体全体が怪我に痛む。

だが俺には目立った怪我なんてない。

俺の魔法の反動もあるんだろう。

だがこの体から力が抜ける感じは“赤い人型”の攻撃を受けた代償だろう。

「たくっ・・・」

ふざけんなよ！。

なんだよあの戦闘狂は！。
バトルジャンキー

俺は戦闘狂にでも愛されてんのか（ボコられる的な意味で）！？。
バトルジャンキー

嬉しくもなんともねえよ！！！！。

ああ〜生きててよかった（涙）。

ああ〜あの地獄すら生温いあの殺し合いを今ごろ冷静に考えたら震

えてきやか^がった。

ガクガクブルブル（心で怯えて体は動かない。ようは放心と考えていいだろう。）。

ああ、だけど俺

殺したんだな。

いや体が霧のように消えたと言いつけるが結局俺はあの“赤い人型”を殺したんだろう。

だけど慣れた事だ。

俺もこの世界に転生してから人を殺してきた。

たとえそれが飢えに飢えた盗賊が村に襲って来たとしても俺はこの手で道具でどんな手を使ってでも殺してきた。

それが村人の為だと独りよがりな事でも。

たとえその守った村人から怯えられても殺してきた。

それは少なからず村人の為、生活費の為だし何よりも

俺が生きていたいからだ。

そんな小心者の俺が“殺されそうだった”から“殺してしまった”と言いつても腹立たしい。

今まで殺して来た奴らを俺は何とも思わないのに。

いや思わないようにしなければ俺の精神が壊れる俺なのに。

なんなんだこの言いようもない喪失感は。

ひどく不快だしただけで何か大事な“ナニ”かが消えたこの苛立ちは。

「・・・糞っ」

俺らしくない。

しっかりしろジェットお前は機械だ機械じゃなきゃいけないんだ。

無駄な同情は捨てる。

じゃなきゃ

俺は生きていけない。

ここはある空間。
何も無い空間
色もない空間。

その空間にポツンっとひとりの男が立っていた。

「さて、ではジェットはその数時間前に何があったのかお話ししよう」

その口調は皮肉げであり何が起こるのかと楽しみな子供のよう。

だがそこにいる人物が見えない。

いやちゃんとその場にいるがその空間の色に同化している。

僅かにその男の口と目らしきものがその空間の色に同化してないからこそわかるのだろう。

「とその前に」

「まずその話しをする前に“ある人物”を少なからずでいい少し知ってもらいたい」

いちいちと勿体ぶるように違う話しをする。

「そもそもジェットくん・・・いや　　くんは
・・・おっと済まないどうやら“今”のジェットくんの影響で“前
の名前”は出せないようだ

ククク、生まれもった真名を無理矢理改変するとは恐ろしいものだ」
愉しげに男は笑う。

「まさかそこまで自分の名前が嫌いとは・・・
これは世界修正のどうこうの問題じゃない」

男の他にもう一人の男が割り込むように呟く。

「おや、私の空間に入るとは・・・そんなことができる君は人外だ
ね」

呆れる様に空間に同化している男は言う。

「あたりまえだ
俺は“神”だから」

堂々と神は威張る。

「それで？その神がこの私になんの様かね？」

「はっ！白々しいさつさと“あいつ”にしたことを解け」

「なんのことかね？」

「とぼけるなよ“愉快犯”」

ピクリと空間の男は僅かだが動揺するそしてすぐ。

「・・・これは驚きだ冗談かと思ったがまさか本当の神とは」

空間の男は僅かに驚きそして尊敬に似た感情の視線を神に向ける。

「あたりめえだ

」

「ククク、これだから世界は面白い」

空間の男は笑い、神は無表情だが僅かに怒りの念が伝わる。

「いいからさつさと“あいつ”に掛けた“ナニ”かを解け」

「いや、それには及ばないよ

もう“会わせた”からね」

空間の男の言葉に神は疑問をしてそしてすぐ

「ちっ、そういえばここは“お前の空間”だったか」

忌々しげに周りを見ながら呟く。

「ああ、もう私は何もしないさ

充分“彼”のありふれた異端だがそれを補うふざけた異端も見たことだしね」

「たくつテメエみたいな好き勝手する奴らのせいで調整が大変だったつのに

管理してるの实质俺一人なんだぞ？」

頭を掻きながら空間の男を睨む。

「いや、すまないね」

言葉と反し反省のない言葉で謝る。

「たく・・・それで？」

「ん？」

「あいつの何知ってるんだ？」

神の言葉に

「ククク、可笑しなことをあなたならなんでも知ってるでしょうに」

空間の男の言葉に

「阿呆かアカシックレコードみたいな期待してんのか？
そんなのあるわけねえだろ仮にアカシックレコードがあったとしても“その世界の情報だけだ”」

呆れ気味に神は間違いを正す。

「それはそれで充分凄いと思うのだが」

呆れ気味に空間の男は言う。

「たかが一つの小さい世界の情報なんて大したことねえよ
それよりさっさと喋れよイライラすつから」

「随分と彼にご執心のようで」

「あたりめえだ、俺が全世界管理にいながらただ一人俺の予想の斜め上に行くんだからな」

「ほお、やはり彼はあなたすらも驚く存在か」

「残念ながらなあいつの願いが下らなすぎて少し奮発してやったってのに……」

神は一旦言葉を止め。

「あいつ“魔法”を自力で手に入れやか、ったふざけてるのもいいところだ」

神の言葉に疑問を思い空間の男は

「？別に“あの世界”では普通なのでは？」

「あいつのスペック転生前とほぼ同じだ」

「ちよつとそれは酷すぎるんじゃないかね？」

引きつた声で空間の男は言う。

「だから願い三つもやったってのにあいつが下らないこと願うからだよ!!!」

それに最後の願いは奮発してやった!!!

それにそういう意味で言うてんじゃねえよああ〜面倒だやめやめ!

「

神は頭を抱える。少し不憫に思い話しを変える。

「だがよく無限にある世界を管理できるものだね？」

「ああ？ああ“俺達”がいるからな」

神の言葉に

「・・・なるほど一人でも限界はあるのか」

「ほら、もういいだろ？いい加減言え」

「ククク、しょうがない」

空間の男の言葉に神はイラッとしたが耐える。

「ジェットくんはまあ悪く言つが偽善者に近いと言つべきなのかな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

続けるとジェスチャーする。

「だが別に助けようとも見捨てようとも思わない
良く言つて冷静

悪く言つて優柔不断」

「だが敵を殺すのかと言われれば殺さないし
殺す

冷徹であり

臆病」

「結局何が言いたい？」

業を切らしたのか神が苛つきながら喋る。

短気だなあと心で呟く。

「結局のところ彼は流されるまま流され続けるんだよ
それが自分に死が訪れようともね」

俺は歩く。

何故ギルドに出たのだろうか？。

ただなんとなく歩かなければいけないと思ったからだろう。

マグノリアに少し離れた森に入りながら歩く。

歩きながら少しした後。

霧が薄く出てくる。

進むにつれ霧が濃くなる。

うわっこれじゃあ前が見えん。

足を一旦止めどうするかを考える。

.....帰るか。

なんか誰か俺を呼んでるんだ！（キリッ！
とか恥ずかしすぎる。

俺疲れてるのかな？いや疲れてるな。
だってほら景色がなんか可笑しいもん。

え？

可笑しいなさつき森にいたのになんで景色が赤いの？白いの？。

アハハハとうとう俺の頭が可笑しくなったか。

って！どう考えても可笑しいだろ！？。

どうすんだよ！どう帰るんだよ！？。

おっ落ち着けまっまずは情報収集だわからないときこそ情報収集だ。

景色を俺はまず見る。

これどういこと？。

まるで境界線みたいな景色だ。

俺の立っている半分の景色を見る。

空は光がない真っ暗な夜。

うん。この時点でおかしいだつてさっきまで明るかったもん。

いやいやきつと俺が気づかない内に夜になってたんだうん

大地を見る・・・真っ白だ。

これは・・・雪？。

俺は恐る恐る手で掴む。

「・・・灰？」

意味がわからん。

灰を見た後もう半分の景色丁度俺が立っている境界線の境目で見る。

雨・・・真っ赤な雨が振っている。

空は真っ赤な雲に隠れて見えない。

土も真っ赤な雨に打たれ続けて赤土になっている。

・・・まるでわからん。

「・・・どういうことだ？」

無意識に呟く。

突如

ゴッ！！！！！！

こちらが不利か・・・なら。

ジャキッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ズドン！！！！

「な！？」

あつちが“鈍器物”ならこっちは“銃”だ。

できることならこれで終われ！。

「ちiiiiiiii！！！！！！」

糞っ避けやがった。

なんちゅう反射神経だ。

「だあああああ！！！！！！」

うぜえ！うぜえ！うぜえ！うっぜええええええ！！！！！！」

大声を遮断し自分の世界に入る。

集中しろ・・・あいつを殺すんだ・・・じゃなきゃ俺が死ぬ・・・
・・・・・・・・ターゲット確認・・・排除開始。

スパン！

「・・・首跳ね飛ばし成功
・・・ミッションコンプリート」

「・・・周りの景色が森に確認
ホームへ戻ります」

あれは夢か？現実か？それとも・・・（後書き）

正直難しい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3548w/>

\(^o^)/

2011年11月27日00時52分発行